

289-Ts94ウ
1200500732575

289
1

海の征服者
— 堤清六 —



始

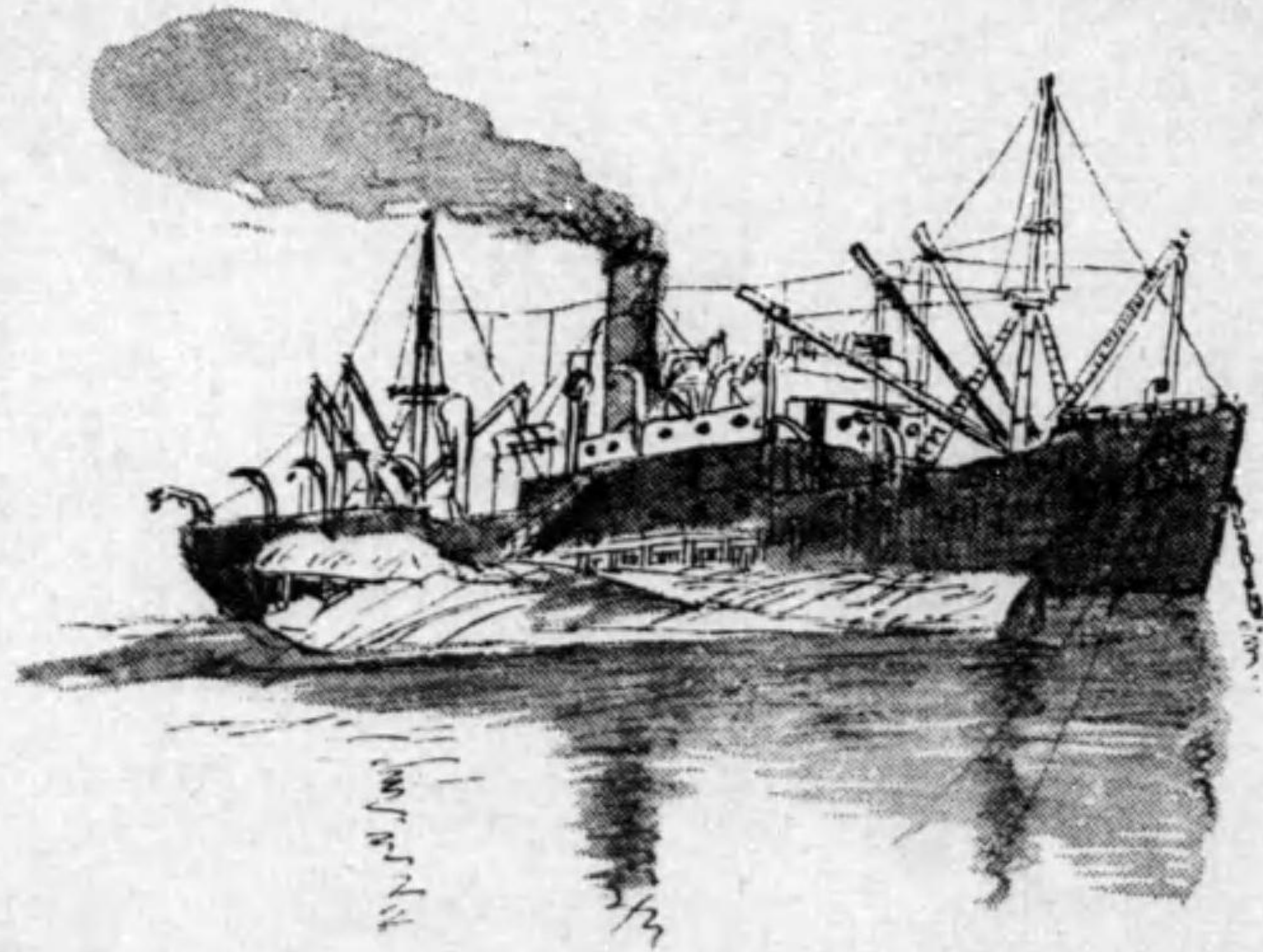


345^v

289
Ts94

北海の征服者

川端克二著



984
121

はし が き

時代は、天才よりも努力家を要求してゐる。
堤清六は、努力の人であつた。

日本最大の漁業會社——日魯漁業株式會社の創立者堤清六の生ひ立ちを、筆者が知るを得たのはもう數年の昔である。その頃、筆者は北海道の一漁業會社に勤務してゐたので、この漁業王の足跡には異常な關心を拂はずにはゐられなかつた。

北越の古風な街から、如何にして天下の漁業王が生れたか！ 古着屋の伴が、如何にして日本の水産業を世界一に押し上げる働きをしたか！ 非才及ばずながらその謎を解き、數奇な半生を小説化することは、筆者數年來の宿望であつた。

しかしここでは、その最も波瀾に富んだ青年期——カムチャツカ半島に日本北洋漁

業の基礎を築くまで——の記述に止めた。

筆者のもう一つの目的は、あまり世に知られない晩年の郡司大尉——漁業家としての郡司成忠大尉を描くことであつた。大尉は堤清六のよき伯樂であり指導者であつた。

これまで筆を染めてきた海洋小説に一線を劃したい——これが筆者の念願である。僅かでも、読者が、北洋の息吹きを感じてくれるならば、望外の喜びである。

昭和十八年度初秋

この稿を脱する直前、名譽の召集令状を受けたる感激に浸りつつ

川 端 克 二

目 次

雪の町	三
プロング岬	一九
同志	四
船は北へ	七
クルチューフスカヤの麓	一〇〇
胎動期	一四六
二つの陣營	一八〇
陥穽	二二二
新天地	二三八
道は拓け行く	二七〇

北海の征服者

—堤 清六傳—

雪の町

振武館道場。

分厚い樺の看板の文字が、殆ど雪に埋もれて見えなくなつてゐる。

「よう降る。さすがは越後ぢや」

二階の窓をこちあけて見て、師範の大野虎雄は感嘆の聲をあげた。拂曉の薄明りの中で、雪は小やみもなく降つてゐる。降るといふよりも空間を隙なく埋め盡してゐる形だ。しかも、大寒らしい針のやうな風に乗つて容赦もなく屋内へ吹き込んでくる。

大野は急いで窓をしめ、髭についた雪をぶると拂つた。

「この調子では、今日は一人もやつて來んかも知れんぞ」

「はア……ばか降りますこんですのう」

内弟子の高橋榮吉が、まだ寝足りない眼をしょぼつかせながら生返事をした。

夏でもひんやりとする道場の床である。氷のやうな冷たさが、足裏から脳天までつきあげてくる。大野は兩腕を胸に組んで寒さを堪へながら、壁にすらりと並んだ門弟たちの名札を見上げた。

その數約百名。階級の上下を問はず、この三條の町で、凡そ骨つぽいと言はれるほどの若者の大半を集めてゐる。名稱を「北越育英會」といひ、日清戦役の勃發した昨年来、町を覆つた尙武の風に促されて結成された一種の體育團體であつた。春秋二期の武道大會と、いま嚴冬の寒稽古が名物である。

その寒稽古が、十數年振りと噂される寒さと大雪に禍されて、今年の名物の名を失ひかけてゐるのだ。三人、四人と缺席者の數が、積雪の嵩に比例して殖えて行き、昨日などは遂にその半數が顔を見せなかつた。

(無理もない)

と思つた。積雪はもう雁木(二階の窓下から街路へ張り出した庇)の上にもまで達してゐる。一日がかりで漸く排雪された細い通路が、昨夜のうちにまたすつかり埋められてしまつたのである。いかに寒稽古だといへ、犬一匹通らぬ早曉、腹までぬかる雪を掻き分けての道場通ひは至難の業に違ひなかつた。

(だが……)

何か割り切れぬ氣持である。この道場のやうに、薄暗く空虛な淋しさが大野の胸を掠めた。誰も來ぬ、と諦めてゐながら、一方では、階下の門を叩く門弟の聲を期待してゐる心であつた。

柱時計の打つ音が聽えた。定刻の午前五時である。

「やつぱり來んな、育英會も雪には敵はんとみえる。どうだ高橋、内輪同志で汗掻くか」

「はア。揉んで頂きましよかの」

大野は胴をつけ、鉢巻を結んだ。そして、竹刀を取りに立ち上つたときである。不意に——全く不意に、ぎしぎしと窓をこじあける音がした。

「あきや！」

頓狂な聲をあげた高橋の面上にピューッと雪が吹きつけてきたし、同時に、白い雪の塊りのやうなものが、どさツと窓から床の上へとび下りてきた。——門弟の一人には違ひないが、それが誰だかすぐには判らなかつた。

闖入者は急いで窓をしめると、まづ竹刀と稽古道具の雪を拂ひ、それから、胸のあたりまでこびりついてゐる雪を拂ひ落した。その場にきちんと正座して挨拶した。

「遅参して申譯ごせえません」

大野も高橋も、それで漸く相手の顔が判つたらしく、

「なんだ、堤か！」

「清六かい……」

と、呆れたやうに笑ひ出した。

「なんせこの雪で、玄關が塞がつてしまひましたので……二階から入らせて頂きまして。無作法ばしてお許し下さい」

十六歳にしては落着いた物腰、激みなく澄んだ聲音である。これといつて特徴のない温和な丸顔が、雪と寒さで林檎のやうにはてつてゐる。

大野の顔から笑ひが消えた。門弟の中でも最も平凡な少年十上町の古着屋「近清」の總領息子であることを知つてゐるだけで、格別氣にも留めてゐなかつたこの少年にこんな激しい氣力があらうとは意外であつた。上町からこの道場まで十町はあらう。「吹きさらしの川ぶちを通り、橋を渡り、狭い街路を曲りくねり、寒風をまともに受けながら體全體で雪を掻き分けて進む少年の姿が、ありありと大野の眼にうかんだ。」

(商家の子だとして莫迦にはできん)

長年東京にゐて、士族の子弟を門下にしたこともある大野にとつて、これは新しい発見であつた。この少年一人のお蔭で育英會百名の顔が立つ。自分も師範として教へ甲斐があつたと思ひ、大野の胸は喜びに明るくなつた。

清六は稽古着をつけ、正面の神棚に拜禮すると、竹刀を握つて高橋の前に進んだ。
「榮吉ろん、一本お願ひします」

二人は、型の如く一禮して左右に別れた。

「えいッ」

「おうッ」

身長も高く、胴廻りも太い、自分より五つ年上の高橋の體が、のしかかるやうに清六の眼に迫つてきた。手強い兄弟子である。掻き分けてゐるときは無中だつた雪道の疲れがでてきて、汗がだらだらと額を流れる。

「やあッ」

威赫する叫び。眩惑するやうに小刻みに動いてゐた竹刀の尖が、矢庭にフツと伸びてきた。

（得意の突きだな……）

と、思はず恐怖に萎縮しかけるのを、ここだと丹田の力を盛り起して、

「えいッ」

突かれる覺悟で踏み込んで行つた。びしッと小氣味のよい手ごたへがあつた。小手に入つてゐた。參つたとは言はず、痺れる右手に竹刀を持ちかへて逆襲の姿勢にかか
る高橋の耳元へ、

「よし、一本！」

大野師範の叩き据えるやうな聲だつた。

「堤！ こんどは僕が相手だ」

清六は耳を疑つた。一瞬に跪坐して呼吸を休めながら、放心したやうに、面をつけ

てゐる師範の姿を見守つてゐた。三十日の寒稽古を、今日で二十五日目の道場通ひだつたが、まだ師範直々には一度も稽古をつけて貰つたことのない清六だつたのだ。喜びよりも、驚きと緊張が彼の躰を固くしてしまつた。面を外して汗を拭ひながら、高橋が、痛い目に遭はされるぞと言ひたげな微笑を送つてゐる。

竹刀にびゅーッと、風を鳴らしながら、大野は道場の真中に立つた。釣られるやうにその前に進み、一禮して立ち上ると、棒みたいに動きのとれなくなつた清六の五體だつた。泰然と晴眼に構へてゐる相手——それが、山岡鐵舟を師とする一刀正傳無刀流の達人、振武館道場主大野虎雄だと思ふと、厘毛の隙も見出せなかつた。汗——こんどは冷たい脂汗が、たらたらと腋の下を傳はつた。

「どうした、どうした？ 雪道を掻き分けて來た元氣を忘れたのか！」
 烈しいが、愛情の籠つた聲音だつた。

「堤！ 儂を大野だと思ふな、清兵だと思へ、清兵だと思つてかかつて來い！」

(さうだ、憎い清兵だ！)

清六の胸がカッと燃え立つた。廣い道場の隅々へ響く疇高い掛聲と共に、彼は、眞向微塵に相手の面上へ打ち込んで行つた。

二

清六は、往きと同じやうな難儀をしてわが家へ歸つてきた。

さすがに雪は、もう晴れてゐたが、空は重苦しい鉛色だつた。そして地上は、見渡す限りの白一色である。

先祖が近江の國の出身なので、「近清」の屋號で通る堤商店は商都三條でも指折りの古着屋だつた。繁昌を誇る十五間間口の店舗は、昨夜からの雪にすつかり埋め盡されてゐたが、雁木の下はもうきちんと除雪されて、人の出入りに差支へはなかつた。

恰度地下室へ降りて行くやうに、積雪で堆高い街路から雪の段々が拵へられてある。

「只今」

手足が痛いほど冷たかつた。少しも早く炬燵の中へもぐり込みたかつた。

「おこ、難儀ぢやつたらうの」

母親のチョが、その聲のやうに優しい小柄な姿を奥から覗かせると、張り詰めてゐた氣が一べんに緩んでしまつた。ほんの形ばかり着物の雪を拂ひ、藁沓ワラジを脱ぎにかかると、

「清六か。待て」

母親を押し除けるやうにして店先へ姿を現はしたのは、伯父の清吉であつた。新潟へ分家して一戸を構へ、その肚の太さで兄吉平以上の商賣上手と定評のある清吉であり、清六にとつては父よりも怖い喧し屋の伯父であつた。商談のためもう半月以上も逗留してゐたが、その間、清六は何べん雷を落されたか知れなかつた。

「立派な商人になれ。それにや、若えうちからよつばら苦勞せんばあかん」

これが、清吉の口癖であつた。——今朝曉方、寒がる清六を無理矢理雪の中へ追ひ立てたのも清吉であつた。

清六が店へ上らうとするのを押し留めた清吉は、土間へ下りると、隅に立てかけてある竹箒を掴んだ。

「清六！ そんげな雪だらけな體して、汝おまえよく家へ上らうとしたの、おらがよう拂つてやる、向ふ向け！」

清六は素直に廻れ右をした。竹箒が、ざらッと紺緋の肩を打ち脊を打つた。だが、それは、雪を拂ふには強すぎる衝撃であつた。思はず前のめりによろけかけると、

「しつかり立つとらんか腑抜け！ さ、こんどはこつちを向け」

正面に向きかはると、いきなりびしりツと頬から顎に痛みを感じた。清吉にしてみれば、清六の襟についてゐる雪玉を拂ひ落したつもりなのだが、鞭のやうな竹箒の尖

端が、清六の白い滑らかな肌を弾いたのだつた。

清六はちつと我慢した。相手が大野師範ならば、清兵だと思つて打ち込んでも行けるのだが、清吉伯父では仕様がなかつた。——尤も、その大野師範には、打ち込んで行つただけで散々に叩き返され、胴も腕も肩先も、まだ打撲傷のやうに疼いてゐたがそんなことは口惜しくもなんともなかつた。直々稽古をつけて貰つた嬉しさで一杯であり、大野師範の強い愛情が胸にしみる思ひであつた。

それに較べて、清吉伯父は、肉身でありながら、ただ殿重であり冷酷であつた。よほど自分が憎らしいに違ひないと清六は思つた。小柄で身丈は自分位しかないのに、すんぐり横太りして顎の突き出てる清吉叔父の、老眼鏡越しに炯々と光る眼を、清六は負けずにちろつちろつと睨み返してゐた。

朝飯の前に、清六にはもう一つ大切な日課があつた。それは五十嵐川の水汲みであつた。水道の設備のないその頃の飲料水は、川水を濾過する「水船」の装置から、肩

で臺所へ搬び込んだものであつた。このかなり辛い役目も、清吉伯父が来てから清六の専任となつた。

紺紺を無地の仕事着に着更へ、素足に草鞋を穿き、水桶を天秤に擔いで、清六は勝手口を出た。川までは三町、家々の雁木の下を通り、街路を横切り、ふうふう白い息を吐いて急いだ。雪が霽れたせいか、一しほびりりと肌に應へる寒風であつた。

「あれ、近清の總領さ。大儀なこんでござえますのう」

擦れ違ふ水汲み歸りの内儀さん連が、そんな聲をかけて過ぎて行つた。清六は擦つたさうに笑ひ、一人々々にびよこびよここと頭を下げた。「近清」の暖簾に對するお世辭のつもりではあらうが、皮肉でも言はれたやうな氣持にもなつた。だが、そんな狭い感情も、五十嵐川の悠々たる流れを眼にすると、跡形もなく忘れることができた。

清六は、この故郷の川が好きであつた。岩越國境、朝草山に源を發し、越後平野を潤ほして信濃川に注ぎ込む五十嵐川——雪空を映して今は鉛色に澱んではゐるが、石

灰に富む澄んだ水質は、いつも初雪のやうに淨らかなのである。

吹きさらしの堤の上は寒かった。日本海を渡る北西の風が、海拔二千尺の彌彦山の肩を掠めて吹き下してくる。清六は、その寒風に挑むやうに眦を上げ、ぐつと彌彦山の白い頂を睨んでゐたが、やがて堤の上にしやがみ込み流れに眼を落した。

「……………」

川は何かを叫んでゐる。何かを清六に呼びかけてゐる。

絶えず新らしく、しかも悠久そのままの姿で、一刻の休みなく流れてゐる川。信濃川に合流し、日本海に注ぎ、佐渡の島根を洗ひ、やがてこの足下の水は遠く、霧領沿海洲へ、オホーツク海へ、霧深い北洋の涯へ、越後の鹽をはこんで行く。

(ちつとしては居れん……)

胸の底から、熱いものがつきあげてくる。

寺院と金物と、十日目ごとの市日が名物で、徳川時代とあまり變つてゐさうもない

靜かな商都、三條の町。ここで生れ育つたことは果して己れの幸運であらうか。傳統の命するまま古い因習の一つ一つを踏み越へて行けば、確かに前途に何の不安もない。「總領さ」として「近清」の暖簾をつぎ、清吉伯父の言ふやうな「立派な商人」になれるであらう。

(だが、それでいいのか?)

清六の眼は流れに吸はれてゐる。その流れの上に、夕餉時の愉しい團樂のさまがうかんでくる。弟の清吾、清治郎、四郎、妹のシン、ヨシ、ムツ、まだ嬰兒のハルを抱いた母親のチョー——その大勢に圍まれて、着膨れた體を柱に凭れ、眼を細めて晚酌の盃を舐める父吉平の姿、そこに清六は己れの未來の姿を見た。そして次の瞬間には、その光景を打ち消して五十嵐川の強い逞ましい灰色の流れだけが残つてゐた。

「六さ、そげなとこで何ば考へてるの?」

その聲に、清六は初めて我に返つた。振り返つて見なくとも、自分を六さと呼ぶの

は、羅紗問屋小出商店の娘、糸子以外にはない筈であつた。背を向けたまま、

「お前こそ、こんげに早よから何所へ行かつしやるんだ？」と反問した。

「ちよつと三ノ町まで使ひに行くところだが」

「三ノ町なら、わざわざ堤を通らんでも行けるぢやないか」

「でも……でももう」

糸子は、清六と同じ年の十六にしては大柄な體を、前へ折るやうにして笑ひながら、「お前さんが、水汲みを初めたといふで、どんげな格好をしてやつてなさるかと思つて。そしたら、水も汲まんで、堤の上にしやがみ込んで居るんだもん。やつぱし、寒の水は冷たいこつてせうの、ほつほほは」

「馬鹿！ 冗談こかんでさつさと行け！」

清六は、立ち上つて呶鳴りつけた。精一杯の大聲だつた。——幼馴染で學校友達で

喧嘩相手でもあるこの糸子を、いつか親同志が自分の許嫁にきめたといふ噂を耳にしてからは、なせか正面まへに顔を見ることができなくなつてゐた清六だつたが、今の一喝で胸の中のもやもやが一遍に吹き飛んだ思ひであつた。

吃驚したやうに、その面長な顔を泣き出しさうに歪めて、小さく堤を急いで行く糸子をちらりと見送つて、清六は水桶を提げ、水際へ降り立つた。水船に渡された歩板には氷が張り、ぎしぎしと、氣味悪くしなつた。清吉伯父の怖い眼玉を頭に泛べながら、清六は大急ぎで水を汲みはじめた。冷たい五十嵐川の寒の水が、清六の草鞋を濡らせ、色白なふくら脛を濡らすのだつた。

彌彦の頂きが雲に隠れ、再びちらちらと粉雪が舞ひ落ちてきた。

ブロンゲ岬

一

この物語の、時と舞臺は飛躍する。

明治三十九年七月。

所は、沿海洲黒龍江河畔、間宮海峽に突出したブロンゲ岬の一角である。

鉛色の太陽が、シベリヤの曠野の涯を照らしてゐる。せい一杯に伸びた雑草が、ゆさゆさと揺れながら、廣漠とした地上を残す處なく埋め盡してゐる。蚊と虻がブンブン唸る。

間宮海峽も灰色である。それは海といふよりも、鐵路のやうに冷たく光つてゐる。その前面に、薄煙のやうに横たはつてゐるのが、帝政ロシアの流人の島——樺太である。

濕つばい海岸沿ひに、點々と丸木造りの漁舎が並び、魚棚には、千鮭がぶらぶらと吊されてゐる。生臭い澱んだ空氣のなかで、露人や原住民の漁師が、聲も立てず、鈍い動作で働いてゐる。毛の厚い露西亞犬が、長々と腹ばつてゐる。

一羽の禿鷹がサツと地上に舞ひ降り、魚の一片を掠めて空へ翔けあがつた。弧を描きながら、消え去つて行つたその南の空の下から、そのとき、一人の男が、ぼつんと點を打つたやうに現はれた。

珍らしい旅行者である。しかも若い日本人である。

紺の背廣、白の半ズボンに革の長靴を穿き、手には風呂敷を提げてゐる。中肉中背といふよりも小肥りにちかい體つきで、碁盤縞の烏打帽から覗いた顔は、おつとり取りすました卵形である。應揚に釣り上つた眉と、眠たげな、夢をみてるやうな二重瞼筋の通つた優しい鼻。もしその唇が、への字なりにキリツと結ばれてゐなかつたならば、寧ろ女性的ともいへる柔和な顔立であつた。

かなり草疲れてゐる。腹も減つてゐるらしい。長靴をひきすり氣味に歩きながら、憩ひ場所でも欲しいのか、うろうろと眼を配る。だが、眼に入るものは露人の漁舎ばかりだつた。毛色の變つたこの青年を、漁師たちは仕事の手を止めて、胡亂げに見守

る——

「やア！ 貴方は日本人か！」

さう叫んだ者がゐる。青年はぎくりと立ち止つて、きよろきよろ四邊を見廻した。聴えたのは確かに日本語だ。しかも、それらしい同胞はどこにゐるといふのだ？

網から外したての鱈を井桁なりに積んで、吠の鹽をスコップでぶつかける——その亂暴な「鹽切り作業」をしてゐる露人たちの中から、すつくり立ち上つてこつちへ歩いてくる者がゐる。糸のやうに細い眼と、顴骨の張つた代赭色の顔——疑ひもなく日本人だつた。

「……………」

青年は、眼を瞠つたままである。

「珍しいな。貴方、どこさ行くところだ？」

訊かれて、青年は聊か警戒の色をうかべながら、

「はア、僕は、ニコライエヴスクへ行かうと思ひましてな。ニコライエヴスクで宿をとるつもりです」

「ニコライエヴスク？ 君、君、そりやとんでもねえ話だ。ニコまではまだ二十露里——日本の道程で五里はあるぞ。それに、この御時世だ、宿屋なんか一軒もあるもんでねえてば！」

北海道訛りの、しやがれた聲だつた。年配こそ、旅行者と同じ位の若さだつたが、前者には見られぬ豹のやうな闘志が、そのキリツと緊つた、全身に漲つてゐた。相手の困惑顔に漸く微笑をとり戻して、

「ま、俺たちの小屋さきて一服せばええ、だいぶ參つてるやうだし。……俺、函館の平塚常次郎つての、御覽の通り、露助漁場さ買魚に來てる者だ」
言ひながら、もう歩きだしてゐた。

小屋といふのは、やはり露人の漁舎と同じ一劃の海岸線に在り、天幕張りのお粗末

な堀立だった。入口の扉代りの垂れ蕙へ、鹽と鱗だらけの掌をざらッとこすりつけながら、平塚は内部へ聲をかけた。

「おい、お客人は伴れてきたぞ」

「客だア？」

蕙を刎ねあげて顔を出した男は、平塚よりもう一廻り豪傑の型だった。額の禿げ上った赭ら顔に、大袈裟な八字髭をピンと立つて、團栗眼でデロリと相手を一瞥した。青年は、また一人の同胞に會つた嬉しさよりも、不安の方が強いやうな顔つきで、平塚に促されるまで、じつとその場に佇立してゐた。

二坪足らずの土間に蕙を敷き、隅っこには寢具や炊事道具などが雑然と押し込んである。饅えた生臭い匂ひがむつとするほどたち籠つてゐる。

「さ、遠慮しねえで、すうツと入つてくれ。こりや仲間の福本萬作つて男です」

平塚は、青年のために座を設けながら、八字髭を紹介した。

「は、こりや申遅れまして……僕は、越後三條の者でがして、堤清六と申します。」

青年は、蕙の上に四角く膝を揃へて挨拶した。

「何しに、ニコさなど行かつしやるかね？」

平塚に始終を聞いた福本が、叱りつけるやうに質問した。

「はア、その……貿易の小手調べみたいなことをやつて見やうと思ひましてな」

「貿易？」

「實は、僕は、せんだつての日露戦争に、酒保に隨いて満洲へ行つとつたんです、吾家の商賣は古着太物屋でしてな、まづ舊舗の方で、おとなしく暖簾を守つてればええものを、戦争がはじまるとどうにもぢつとしてられなくなりまして、友達はどしどし兵隊になつて出征する、僕には一向お召しも來ない……到頭我慢がなくなりましてね、傳手のありましたを幸ひ、酒保付きの賣子になつて満洲へ渡りました。なアにほんの一年足らず、満洲の隅っこでうろついてゐただけなんですが……」

内気なはにかみ笑ひをうかべながらも、急に多辯になつたこの青年——清六の言葉を、平塚と福本は、大した感動もなささうに、フムフム頷きながら聽いてゐた。

「それで、その満洲生活の間に、しみじみと考へたこんですが……これからの日本の發展の途は、對露貿易にある！理由を訊かれるとはつきり答へられんのですが、何となくそんな氣がしたんです。戦争も無事に濟んだし、愈々これからだと思ふと、もう矢も楯も堪らなくなつて、満洲歸りの足を碌すつぽ洗ひもせんで、とび出してきたやうな始末です。まづ今年は、相手方の打診て位な目的で、ここにこんだけ日用雜貨や見本を携へて來ました」

と清六は、傍に置いた風呂敷包を指さしてみせた。

「ふうん成程。そりや貿易も肝要にや違ひないが……」

福本は、キナ臭い露西亞煙草の烟をふきあげながら、にやにや笑ひだした。

「あんた一體、どんな方法で此地へ渡つて來なすつたかね？」

「は？」

「まさか、泳いで來た譯でもねえでせう？」

相手をはぐらかすやうな質問だつた。清六は、さすがにちよつと鼻白んだ様子である。

「もちろん船です。越後の衆で青木清次郎ちう人の持船、三洋丸といふのに新潟から便乗させて貰ひました」

「ふうん、三洋丸……聞いたことがあるぞ。その船は生積船ぢやらうが？」

「よく御存知で。やはりこの沿海洲の、此地からちと南の露人漁場へ買魚にやつて來たんです。僕は漁場にや用事がありませんから、すぐにニコライエヴスクへ向けて出發したやうな次第で……」

する分無鐵砲な行動である。大ていの人間なら、この青年の烈しい覇氣と實行力に驚嘆の眼を瞪りさうなものである。しかし、この天幕小屋の二人の住人は、一向に驚

いた様子もなく、寧ろ嘲弄にちかいにやにや笑ひをつづけるだけである。平塚は平塚で、革上衣ジャンパーを脱ぎ、七輪を天幕の外へ抱へ出して炊事の仕度にとりかかるし、福本は福本で、無遠慮に兩脚を投げ出してそつぽを向いてゐる。清六も、さすがに張合ひなささうに言葉を納めかけたとき、

「君！」

吃驚するやうな聲で、福本が清六に向き直つた。

「君は三洋丸に便乗しとつてどんな氣がしたかね？ 一緒に漁業をやつてみようといふ氣は起らなだかね？」

「は？」

「漁業といふものに關心は持たなだかね？」

「そりや、興味は感じました。でも、僕の目的は貿易なんですから……」

「はッはッはは！」

爆發した福本の笑ひが、清六の言葉を遮つた。

「君は貿易に食はれとる。失禮ながら、それが商人根性ちうもんで、金儲けを第一義にしとる證據ぢや。もつと、でつかく眼を開いて見給へ、日用雜貨の貿易なんぞで決して日本は發展をしやせん。これからは漁業です、何といつても漁業ですぞ」

福本の聲は激昂した。天幕の外へしやがみ込んで、七輪の尻を煽ぎながら、また初めたねと言ひたげな微笑を福本に送つてゐた平塚が、清六へ向き直つてぼつりと口を切つた。

「堤君。實は俺も、日露役にや出征して來たんだがね。はッは、かう見えても砲兵上等兵さ。乃木大將閣下の旅順攻略さ參加したんだ。大砲のお蔭で左の鼓膜は破けつちまつたが、有難えことにや、凱旋と同時に金鷄勳章を頂戴しちまつてね……」

氣を吞まれたやうに、清六は無言である。

「だが、堤君。こんどの戦争で、俺がいちばん嬉しかつたことは、ポーツマスの講和

條約が發表になつたときよ。いや、俺も米國ごときがお節介ばしたあの講和そのものには、一兵士として不満の點もねえではなかつたが、あの條約の第一條に

露西亞政府ハ其ノ漁業權ヲ日本國臣民ニ許與セムガ爲メ日本國ト協定ヲナスベキコトヲ約ス

と、この文句があつただけで俺ア、漁師として、泪の出はるほど嬉しかつたね、長年の苦勞が、これで帳消しになつたと思つたね。」

平塚は、飯鍋を七輪から卸し、小刀で生鮭をブツ切りにしながら言葉をつづける。

「堤君！漁師でなけりやこの嬉しさは判らねえ。長年、露西亞の海さ來て、血ば流した俺たちでなけりや、この喜びは味へねえ。だが、まア、聽いて下せえ。御存知だらうが、露領漁業の歴史は古い、徳川時代から俺たちの祖先は樺太サカレンさ來て漁業をやつてゐたんだ。樺太ばかしちやねえ、この沿海洲もカムチャツカもオホーツクも、昔つから日本の漁場だつたんだ。明治八年、樺太千島交換條約で樺太が露西亞の領地になつ

てからも、露西亞は寧ろ日本人の出漁は歓迎しとつた。それは、奴等が、日本人の優秀な漁業技術を學び取りたかつたからだ。——それが、明治十年頃から、やつと漁師として一人前になつた奴等は、思は忘れて日本人を彈壓しはじめたんだ。漁場を横取りしたり、バカ高い税金ばかり……それでも日本人は負けなかつた。先祖が開拓した漁場を手渡してなるものかと、毎年々々、命がけて出漁をつづけた。

千島やカムチャツカに新漁場ば發見した郡司大尉みてえな偉い人も出た。ここにゐる福本さんなんか、カムチャツカさ行つて何邊鐵砲玉を喰つたか知れねえんだ……」

「……」

「それが、その苦勞が、こんどの條約で酬ひられたんだ。北洋の漁業權は、わが大日本の權益であるつてことが、世界中に認められたんだ！俺たち漁師は、肩身も廣く大手ば振つてカムチャツカの涯までのし渡つて行けるんだ！」

平塚の聲は漸く激してきた。寢そべつてゐた體を起した福本が、ニヤリと笑つて、

「おい、魚が焦げるぞ！」

と注意したが平塚は振り向きもせず肅然として言った。

「これもみな、こんどの大勝利のお蔭だ。たくさんの戦死者のお蔭だ。いや、大御稜威のかたじけなさだ」

身のひきしまる一瞬の風が、この貧しい葦小屋へ吹き込んでくるやうであつた。清六は、頭を垂れて、衝たれたやうに己れの膝を嘖めてゐた。

「はッはは、珍客の御馳走に、まづ黒焦げのアキヤジ(鮭)とは失禮な話だども、まア勘辯して貰ふべかな。焦げたものは胃袋の薬だつちうしな……」

平塚が笑ひながら、プスプス煙の立つ金網の魚を持ち込んできた。福本は、夜具の下へ手をつつ込んゐたが、そこから祕藏らしい火酒ウオツカの罎を掴み出すと、奥歯に咬へてボンと栓コルクを抜いた。

「さ、まづ、珍客から一杯……」

「いや、僕は不調法な方でがして……」

「沿海洲ぢやそんな臺詞は通用しませんぞ」

無理矢理すすめられた一杯の酒を、顔をしかめてぐツと飲みほした清六は、ほーッと熱い息を吐きながら、未知の人生の味を切めて知つたやらかな感慨ぶかい表情だつた。

「しかしな、堤君」

福本は、唇を嘗めずりながら、

「露西亞は漁業権を興へると約束しただけで、まだ正式の契約はしてをらんのだ。露西亞をしてあの約束を履行させるためには、國民の——われわれ漁師の熱意が絶対必要ぢや。僕たちが、こんな惨めな格好で、買魚などといふケチな真似をしてゐるのもつまりそのためなんぢや、私利私慾ではない、漁師としての止むに止まれぬ氣持からなんぢや！」

早くも酔ひの廻りかけたその言葉を、横から奪ひ取るやうに、平塚が、

「だども福本さん！ 露西亞も大國だ、約束は破るやうな阿呆な事はせんど。今年の暮か、晚くとも來年の春先にや、漁業條約の細目が出来上り、正式調印の運びになると思ふな。——うん、さうだ、來年の春！ 來年の春にやカムチャッカさ行けると！カムチャッカさ日の丸の漁場ばぶッ建てる事が出来るど！ 堤君！ カムチャッカにや、鮭や鱈が、海の上さ盛りあがるほどずつぱりあるとよ！」

天幕をびりびり顫はせるやうな聲だつた。その一睨みで、鮭や鱈が縮み上つてしまひさうな聲だつた。

清六は、ただ啞のやうに鮭を口に運んでゐた。

小屋の隅の目覺まし時計は、もう八時に近かつたが、北邊——北緯五十三度の夏の白夜は、まだランプも不要な明るさだつた。露人漁場では今日の仕事も片付いたのであらう。ひつそりと人の氣配もなくなり、海峡を行く海流の音が、しんしんと聽へて

きさうな静けさであつた。

平塚と福本の談論風發は猶もつづけられ、火酒ウヰツカの燐が半分ほど空になつたとき、清六がはじめて口を開いた。

「福本さん、平塚さん、これは僕が頂戴しますぞ」

と、二人が皿に残した鮭の皮へ箸を伸ばすと、むしやむしくと一口に食べてしまつた。

「美味い！ 鮭はやつぱり、皮が一番美味しいですなア」

呆氣にとられた平塚と福本を等分に見較べながら、清六は、ケロリとした顔で言つてのけたのである。

二

清六は、それから三日三晩、天幕小屋に逗留した——

第一夜以來、彼はもう「客人」ではなくなつた。彼はいつのまにか「僕」といふ一人稱を「俺」に改めてゐたし、平塚も福本も、年來の友のやうな氣易さで「清さん」と呼んだ。

露人漁場の漁師たちは、日本人の天幕小屋に「うるさい奴」が一人殖えたと思ひ、頭痛の種にしたに違ひない。だか、この新米は、前からゐる二人に較べると、まるで人種が違ふやうに温順しかつた。

嬉しいのか悲しいのか、見當のつかない無表情な顔だつた。黒つばい渚の砂を踏んで、塑像のやうに樺太の島影を眺めてゐるかと思ふと、首や腕にまつはりつく蚊を追ひながら、ぶらぶらと草原を横切り、黒龍江の岸まで歩いて行つたりする。偶には、鹽切り場へ来て、原住民の作業ぶりをぢつと覗めてゐる。平塚や福本の手傳ひのつもりであらうか、却つて邪魔になりさうな無器用な手付きで、鹽切りスコップを握つたりする。ふと仔細らしい顔になり、指で鮭の身長を調べたり、掌に載せて目方を測つ

たりなどしてゐる。

底の知れない利口者なのか、それとも根つからの愚圖なのか、見當がつかなくなつた。

「おい清さん、貿易はどうしたね？」

福本が投げ氣味に言ふと、清六はただニヤツと薄笑ひを見せるだけだつた。いつまで逗留するつもりなのか、或ひはこの一漁期を一緒に働かうとしてゐるのか——それを訊き出さうとしても、平塚も福本も、なせか言ひ出し難かつた。

清六のおつとりした顔の奥には、不思議な、品威といつたものがひそんでゐた。ぼんやりしてゐるやうで、いつ又、人の残した鮭の皮を浚つて食ふやうな意想外な眞似をやつてのけるか判らなかつた。平塚の眼には、自分よりたつた一つ年上である二十七歳の清六が、三十以上の成人にも見えてくるのだつた。

だが清六は、初対面以來、平塚にも福本にも壓倒され、その烈々たる意氣に敬服し

てゐるのであつた。ただ、雪國育ちらしい負けじ魂が、それを素振に現はさないだけであつた。

逗留三日目の夜——

清六はただ一人小屋を出て、海岸に立つた。

その日は格別の大漁だつた。晩くまで漁場をとび廻り、漸く買魚の仕切りを済ませた福本と平塚は、一杯の酒に咽喉をうるほすと、もう氣焰をあげる餘裕もなく、泥のやうな睡りへ落ちて行つたのだつた。

白夜はまだほのぼのと明るかつた。無氣味なほど風がなく、海は一枚の灰色の布を敷きのべたやうであつた。だが清六は、その海の上に、晝間の素晴らしい景觀を想ひうかべてゐた。——海の色を變へるほどの鮭の群だつた。渚へ匆ね上るばかりに押し寄せた鮭の群だつた。

「カムチャツカにや、鮭や鱒が、海の上さ盛りあがるほどずつぱりゐるとよ！」

初對面の晩、平塚が言つたその言葉も、決して誇張ではなささうだと清六は思つた。

獲りこぼしの鮭が、砂にまみれて波打際に轉がつてゐた。昨日清六は指先で測つて驚いたのだが、郷里の信濃川で獲れる鮭の倍もありさうな大きさだつた。脂の乗つた美味さも、この三日間で飽きるほど思ひ知らされてゐた。漁舎イヌベの方からさまよひ出てきた一頭も露西亞犬が、その砂の上の鮭に近づいて行つたが、クンとも鼻を鳴らさずに去つてしまつた。

（犬が食ひ飽きるほど、鮭や鱒が、この北の海に、充ち溢れてゐるのだ！）

驚嘆と確信が、清六の胸を強く衝いた。

彼は眼が覺めたやうに、もう一度、海を眺めた。

そして、この三日間——いや、今夜こそが、自分の生涯の運命を左右すべき、重要な分水嶺であることを、はつきりと意識した。

彼は少年時代から決して平々凡々ではないつもりだった。容姿や言動は平凡でも、内に秘めた魂の強さだけは、誰にも負けはとらなかつた。越後の言葉では、つめいな心の持主だった。は、つ、め、い——それは進取心とでも意譯すべきか。

「近清」の主人として、傳統と因習に埋もれた一生を送りたくなかつた。剣道を學び讀書に勵んだのも、酒保について日露役の満洲に渡つたのも、貿易の夢を抱いてこの沿海州の土を踏んだのも、みな、は、つ、め、い、な氣性の仕業であつた。そして今や、臆ろげながら一本の道を見出し、ひたむきに慕進しやうとした行手を、扉のやうに塞がれてしまつたのである。だが、その扉の向ふからは、魅力に富んだ呼び聲が聴えてくる。開けばそこには、素晴らしい男の世界が待ち構へてゐるに違ひないのだ！

少年時代から、彼は傳記の愛讀者だつた。わけても高田屋嘉兵衛、山田長政、錢屋五兵衛、間宮林藏など、海外に雄飛して國威を宣揚した英傑の事蹟は、骨にしむまで玩味してゐた。また、雪の夜の炬燵を圍む物語に、父母から伯父から隣人から、越後

出身の名だたる人々の立志傳を、耳にタコがよるほど聴かされてゐた。新發田藩の大倉喜八郎、三條の巨商澁谷善助、日比谷平左右衛門など——清六は、それらの人々の面貌や動作まで、いつでも眼先に描くことが出来る位であつた。

だが、ブロンゲ岬の二人の男は、それら既成の名士とは異なり、清六の常識を遙かにとび越へた廣い舞臺の上に立つてゐた。腕力と怒號と荒波の世界に生れ育ち、しかも直情で真劍だつた。日本を世界に押し出さうとする積極的な意志と夢を持つてゐた。その強さ逞まじさが清六を愕かせ、彼の足を天幕小屋にひき留めたのである。

三日間の逗留を、清六は有意義に過した。風船玉のやうにぶらぶらしてゐながら、彼は眼に觸れる總てをひそかに周到に觀察してゐた。そして今、（北洋漁業は有望なり！）

といふ磐石にも似た確信を得た。

（いや、たとへ有望でなくとも、この北洋漁業こそ、われわれ日本人のなすべき仕事

なのだ。満洲の野に骨を埋めた忠靈に應へるために！)

彼は、悩みがふつきれたやうな明るい顔になり、海に背を向けて、すたすたと天幕小屋へ歸つて行つた。

翌朝——熟睡から覺めた平塚と福本は、旅仕度をしてゐる清六の姿に、寢呆け眼をこすつて起き上つた。

「清さん、お前、どこさ行くんだ？」

清六は、炊きたての飯をフウフウ吹きながら握飯カマドをにぎつてゐた。無精髭もきれいに剃つてゐたし、革の長靴も磨かれてゐた。

「俺ア、越後へ歸ります」

「えッ、國へ歸るつて？」

福本が、半信半疑に問ひ返した。

「三洋丸が、明日あたり買魚を積んで新潟へ出帆する筈です。それに乗せて貰はうと

思つて……」

「さうか……」

失望に似た呟きとともに、平塚はちつと清六を覗めた。

「えらいお世話になりました。なんともはや……」

と、來たとき同様な几帳面さで禮を述べてから、清六は、さりげない調子で靜かに言つた。

「平塚さん、福本さん、お願いがありますんだが……この歸りに、是非々々、三條の俺の家へ寄つて下さい。ゆつくりお話し申上げたいことが御座います」

二人がまだ何も答へないうちに、清六はもう菴をまくつて外へ出てゐた。そのまま歩き出しかけて、いきなり振り返ると、突嗟に平塚の手を握り、續いて福本の手を強く握つた。

「左様なら」

清六は、例の雑貨入りの風呂敷包を邪魔くささうにぶら下げ、雑草の露を踏みしめながら、颯然として南へ——薄い朝霧の中へ進み出した。

シホタ山脈が、間宮海峡へ伸ばした觸手の一つ——その赤土の崖の向ふへ清六の烏打帽が隠れて行くまで、平塚と福本は、彼らの小屋の前で棒のやうに見送つてゐた。

同 志

一

豊饒な越後平野は、見渡す限り黄金の波を打つてゐた。

澄み徹るやうな秋空を映して、滔々と野を貫き流れる信濃川の川面を、一艘の荷足船が、小さな帆を張つて滑つてゐた。三條から新潟へ向ふ途中だった。

「朝晩は冷えますよこんですのう」

「彌彦山に雪が降りました」

「今年は豊作ぢやが、また雪で一苦勞せんばなりませんこと」

艫の間に乗つた十人あまりの旅人が、のどかな世間話にふけつてゐた。

堤清六は、莖相りの荷物に背を凭れ、船縁に足を投げ出して空を眺めてゐた。一片の雲もない拭つたやうな空だった。瞞めてゐるうちに、その中へ溶け込んで行きたくなるやうな空だった。

（この空のやうな、広い大らかな心に、なせみんなはなつてくれんのだらう？）

姑息因循な田舎町氣質に、清六は愛想をつかしかけてゐた。

——「近清の總領さ」は、少々頭が變んなつたさうぢや。

——一日中、二階の部屋にとち籠つて、本ばかり讀んどるさうぢや。

——沿海州などへ行きくさつて、何か邪教でも仕込んで来たこんぢやろ。

——商賣さどうするつもりぢや。近頃は、次男の清吾ろんに委せ切りな様子だとの

う。

清六をとりまく隣人の噂は、もつと多く、烈しく、そして辛辣だった。

清六を慰めるものは、變らない一家の愛情だけだった。父吉平も、母チョモ、妻糸子も、それぞれの立場から彼を愛してくれた。殊に、幼な友達の時代から、彼の最もよき同情者だった糸子は、妻らしい従順さで、清六の遠大な理想を理解してくれた。満洲の酒保行きにも、沿海州行きにも、隣町へ旅する夫を見送るやうな氣易さで、笑つて見送つてくれた糸子であつた。

ただ、清六は、何がはなしに父母の眼を恐れた。したいことを遣るがええと、叱言ひとつ言はない両親だったが、その老ひ皺を加へた温顔の蔭に、寂しい諦めと嘆息がかくされてゐさうであつた。——平凡な後繼者であつてくれ、波風のない一生を送つてくれ……その本音を、じつと噛み堪へてゐるやうな両親の姿だった。

沿海州から歸つて半月ばかり経つたある日、父吉平がひよつこりと、清六の裏二階

へ上つてきたことがある。

「何を讀んどのぢや？」

その日も帳場へ出ようとはせず、机にしがみついてゐる息子の肩越しに、吉平は本を取りあげて背文字を見た。

「成吉思汗——なんぞや、講談本かい」

ありありと失望の籠つた調子でさう眩き、本を清六の手に返すと、何か言ひたいのを我慢するやうに階下へ下りて行つてしまつた父——その後姿は淋しさうだった。なせ成吉思汗を讀むか……追ひかけて、その理由を説明する氣にもなれなかつた。

（アジアはアジア人のものだ！）

清六はそれを信じてゐた。

平塚清次郎は沿海州の天幕小屋で清六に言つた。——沿海州もカムチャツカもオホーツクも、昔つから日本の漁場だったんだ、と。だが清六は、その言葉をもつと廣く

大きく解釋したかつた。

四百年前、成吉思汗が、刀槍と石火矢と軍馬を以てアジアを統一したやうに、自分は、産業開發の大道を踏みしめて、アジアをアジア人の手に取り戻すのだ。それにはまづ海だ！ 漁業だ！ 清六は固くそれを信じ、實行の第一線に立つことを心に誓つた。

もとより清六の讀書は「成吉思汗」一冊ではなかつた。民族興亡史を調べ、高田屋嘉兵衛傳を読み返し、眼が觸れる限りの海と漁業との關係書を涉獵した。それらの書物の尠いことを歎じては友人を訪れ、抱負を吐露して共鳴者を求めたが、誰もまともな相手になつてはくれなかつた。小學校時代からの永い交際もアテにはならなかつた。たつた一人、高橋榮吉——かつて振武館道場の内弟子であり、北越育英會の一員として共に劍道を學んだ高橋榮吉だけは、顎を撫でながら素直に清六の意見を聴き、激勵の言葉さへ與へてくれたが、積極的に清六の仲間にならうとは言はなかつた。家業の

及物商を、後生大事に營んでゐる榮吉に、それを望むことは無理かもしれなかつた。

歸郷以來約三ヶ月の毎日は、清六にとつて古いものとの鬭争と、失望との繰り返しだつた。計畫を實現するために必要な同志は一人も得られなかつたし、より以上必要な事業資金は、一錢も手に入る見込は樹たなかつた。

清六は、父母の眼が益々怖くなつた。優しくされればされるほど、築き上げた意志が足許から崩れて來さうな危惧を感じた。

「ちよつと新潟さ行つてくる」

妻にだけさう言ひ残して、清六はぶらりと家を出た。新潟——そこに格別のあてがあるわけではなかつた。だが、日本海に面したその開港場は、尠くとも三條よりは進取的な土地である筈だつた。漁業者も多かつた。彼を沿海州に運んでくれた三洋丸の船主青木清次郎も新潟の住人だつた。訪れて話をすれば、きつといい相談相手になつてくれさうな氣がしたのである。

ただ、重石のやうな壓力を感じさせるものは、伯父清吉の存在であつた。

——立派な商人あきんどになれ。

それを口癖にしてゐた伯父清吉に、清六の計畫に對する理解がある筈がなかつた。滿洲行きにも沿海州行きにも、表向き反對こそしなかつたが、蔭ではきつと面を膨らしてゐたに違ひなかつた。

(會ひさへしなければいいのだ)

とは思ひながらも、新潟の土地を一と足踏めば、そこに伯父清吉の佛頂面が待ち構へてゐさうだつた。

しかし、引返さうにも、船はもう新潟に近づいてゐた。清六は、觀念したやうに眼をつぶつた。相容の世間話はまだ續いてゐたが、連日の心勞が軽い動搖にゆすぶられて、いつかうとうと睡りに吸ひ込まれて行つた。

——清六は三洋丸の船橋に立つてゐた。

彼はいつの間にか、三洋丸の船長であつた。平塚常次郎が、にこにこ笑ひながら、傍で舵輪を握つてゐた。大海は白く泡立ち、風は、眼をあけられないほど強く真向から吹きつけた。清六は、急に船酔を感じ、その場にうづくまつた。誰かが、抱きかかへるやうに介抱の手をさしのべた。振り返ると妻の糸子だつた。清吉は、何しに來た歸れ、歸れ！と聲を荒げて叱りつけた……

「もしもし、もし……」

揺り起す聲と手に、清六はハッと眼覺めた。

「なんに憑つされてゐなすつたか……もう新潟ですがさ」

百姓風の相客が、にやにや笑つて覗き込んでゐた。清六は撥つたさうに居住居を直し、和服の袖からはみ出てゐるフランネルのシャツの袖をたくし上げた。新潟の町がゆつくりと近づいてゐた。

倉庫の竝んだ河岸の一角へ、荷足船はすべり込んで行つた。足板が棧橋にかけられ

た。小さな支那靴を手に提げ、烏打帽を頭に載せて、清六は降りる客の列につづいた。

「清六」

最初は空耳かと思つた。すぐにまた、

「清六！」

清六は、河岸に一足踏み下したまま、ぎくりとして棒立ちになつた。伯父清吉が、腰に手をあて、首を前にのばして、ぎろりと光る眼を鋭く向けてゐるではないか。

意外だつた。しかしなせか、ここで伯父に會ふのが當然なやうな氣もした。歪んだ笑ひをうかべて、清六は頭を下げた。

「何しに新潟なぞへひよろけ出しに來よつた、うん？ 糸が心配して、電信を打つて寄越したぞ」

しかしその返事を訊かうとはせず、清吉老はすぐ後姿になつてすたすた歩きはじめ

てゐた。觀念したやうに、清六は後につづいた。

(弱つたことになつた……)

絶望感が、清六の眼先に、眞暗な幕をおろしかけた。

二

東堀前通り七番町——都心から少し離れたひつそりとした商家町に、伯父清吉の店があつた。屋號はやはり「近清」で、同業の古着太物を商ひ、三條の本家よりも繁昌してゐた。それも畢竟、清吉老の類ひ稀れな商賣熱心の結果であつた。

奥の八疊に通された清六は、初めてきた家のやうに固くなつてゐた。

「主人は店の用事ばしてるからの、ちいと待つてくらつしやいの」

さう言つて伯母が應待に出た。氣さくな面白い伯母だつたが、今日の清六には寧ろ煩はしい存在だつた。世間話をしかけられても、ろくに返事もしないであつた。

出された好物の「かた餅」にも手をつけなかつた。

「なした今日は機嫌が悪いの、清六ろん」

伯母も到頭苦笑して、黙りこくつてしまつた。氣づまりな空氣だつた。清六は、何か陥穽にでもかけられたやうで不愉快だつた。要らぬお節介をして、電報などを伯父に打つた妻の糸子が憎らしくてならなかつた。

しやがれた咳拂ひを一つ聽かせて、廊下から清吉老が入つてきた。

「汝はあつちへ行つてなされ」

煩ささうに伯母を追ひ立てながら、清吉老は清六の前へむづと坐つた。年齢をとつたせいか、長い瘠せた顎が、益々酷薄さうに前へつン出てゐた。白くなつた眉毛の下に、昔と變らない炯々たる眼が光つてゐた。膝に置かれた兩手は、六十年のはげしい生涯を物語るやうに節くれ立つてゐた。

(この手で殴られたこともある)

清六は想ひ出した。あの少年の頃の雪の朝、身體の雪を竹箒で拂はれたときの痛さが、昨日のやうにしみじみと想ひ出された。そして、ふと、その痛さとは反對な、ほろ苦い懐しい氣味が胸にあふれてきた。どんな辛い經驗でも、時間といふ不思議な麻薬が作用すると、甘美な味だけが残る。恰度それである。すると妙なことには、眼の前の清吉老の顔が、急に好々爺のやうな優しさに見えて來た。

「ふッふふ……」

清六は笑ひだした。

「ふッふふ……」

清吉老も笑ひ出した。

想へば長い間、叱り、叱られ續けた伯父甥の間柄であつた。そのくせ、かうして二人きりで一室に對座するのは、初めてなのである。肉親らしい仄かな愛情が、擦つたく肌に感じられるのである。

「汝、まんまと儼にとつ掴まつて、口惜しからうが、はッはは」
 「正直、がつかりましたことつて、おら、伯父さんの説教ば聞きに来たんぢやありませんんからの。うまくやられました」

「清六！」

吸ひかけた煙草をボンと吐月峯へ叩いて、清吉老の聲は俄かに嚴しくなつた。

「汝、カムチャッカさは何時行くつもりだの？」

「は？」

「カムチャッカさ、いつ行く？」

詰問ではなかつた。深い關心から發する質問のやうであつた。

「來年の春、五月頃になりますか。御承知の通り、向ふの漁期は六月頃から初まりますので。雪を掻き分けて鮭を獲るがです。壯快なもんです。はッは、こげなこと言つて、果して行けるかどうか判りやしませんか……」

「清六！ 汝、何といふ……」

清吉老の眼が峻しく光つた。清六を竹箒で拂つたときと同じ眼の色だつた。

「行けるかどうか判らんと！ そんげな弱氣でどうする！ 若えうちは我武者羅で結構。男が一旦志を立てたら、どこまでも押し通して行け。目ざす所へぐつと眼のくり玉を据へて、傍見をするな、何もかも踏み越へて突貫するんぢや！」

驚きに似た感動が清六の心を捉へた。このやうな言葉が、伯父の口から吐かれやうとは夢にも思はないことであつた。

「では、伯父さん……」

清六は顔を上げた。

「伯父さんは、おらのカムチャッカ行きを許して、いや、賛成してくらつしやるのですか？」

「はッははは、おらが反對するとも思つてゐたがだか」

清吉老は、亂杭齒をむき出して笑つた。

「疍まし屋のおらのこつたこて、信用のないのも無理はねえが、清六、おら昔つから汝の最辰ぢやつたんだぞ。満洲へ行つたときも、沿海州へ行つたときも、おら肚ん中ぢや清吉めなかなかやり居ると思つとつた。表向き賛成せなんだのは、まだ雛つ子の汝に、増長慢を起させたくなかつたからぢや」

「……………」

「おらも新潟の生れだ。朝晩、潮ッ風を嗅いで育つた人間だ。魚に縁のねえ商ひだが一と足表へ出りや、川口に舫つてゐる檣の林がいやでも眼に入るんだ。なんぼ老ひばれたつて、おらア、この信濃川の水が、遠いカムチャツカまで續いてゐるぐれえ知つとるせ」

「おらア汝とは違つて、本といへば馬琴の八犬傳か、膝栗毛の草双紙しか讀んだことねえ人間だ。カムチャツカがどんな土地で、何がどれだけ獲れるか、おそろく汝の百

分の一も知らねえだらう。だが、こんだけ知つてゐる。日露の役で死なすつた勇士が、カムチャツカの漁場へ行く道をつけてくんすつたといふことぢや。腰の曲つたおらなどは、行きたくとも行けねえ。若え者が眞つ先に立つこんぢや」

「……………」

「清六、おら汝の稚せえときから、口癖みてえに、立派な商人になれと言ひ聞かせた。今もその氣持はちつとも變らねえ。ただ、商人といふ言葉をもつと大きく廣く飲み込んで貰ひてえんだ……………」

「國を相手にする大きな商人……………」

「さうだ。さうださういふがんだて！」

清吉老は、我意を得たといふふうに大きく頷いた。

清六は妙な氣持だつた。すべてが豫想外だつた。舊弊の權化のやうに考へてゐたこの叔父が、こんな若々しい情熱と、理解の持主だらうとは！ 聊か拍子抜

けのした眸で、清六は、叔父の空とぼけた顔を見守つてゐた。

「清六！ そんで、船の段取りはついとるんか？」

寛いで夕食の膳に向つたとき、清吉老はいきなり質問した。

「船？」

「何を驚く。船がなうてはカムチャッカは愚か、佐渡へも行けまいて。はッはは、僕に委せて置け。恰度幸ひ、賣物に出とる船が、この新潟に一隻あるんぢや……」

清六は、今は放心したやうに叔父の言葉を聽いてゐた。限りない感謝が胸を衝ち、洋々たる前途が眼の前に展かれて行くのをはつきりと感じた。

三

思ひがけない大きな喜びを胸に抱いて、清六が新潟から三條へ歸つてきた日は、恰度十一月の三日——天長の佳節であつた。彼は、叔父の家に半月も逗留したのであつ

た。

雁木に掲揚された國旗の下をくぐつて鬮を跨ぐと、待ち構へてゐたやうに顔を出した妹のヨシが、笑窪をへこませて言つた。

「兄にやさ、よう忘れんで……」

清六は苦笑した。新潟にゐるうち、家へ一枚のハガキも出さなかつた彼なのだ。呑氣なのではない。ハガキも書けないほどの忙しさだつたのだ。

出迎へた妻の糸子も、ヨシの言葉と同じ意味の微笑をうかべてゐた。清六は、この妻のお節介が、自分と叔父の心をつ結びつける緒口になつたことを想ひ出しながら、ニヤリと微笑を酬ひて手土産を渡した。

「あの、お客様が見えてござらつしやるがです」

糸子が言つた。

「客が？ なせそれを早う言はん」

「でも、何だか譯の判らん人だもんで……」

「誰方だ？ お名前は？」

「平塚、常次郎とか、言ふてらしつた」

「何、平塚ッ？」

清六は、とび立つやうに畳を蹴り、階段を踏み鳴らして二階へ上つた。襖の内から高軒が洩れてゐた。

「平塚さん！」

「う、う……これは失禮」

座布団を枕にして、大の字に臥てゐた平塚は、細い眼をこすりながら起き上つた。

「久し振りの畳の上だもんで、ついうつかりとね。いや堤さん、しばらく」

「しばらくでした。沿海洲ではいろいろどうも。よく、あんた来てくれましたなア」

「はッは、嘘ばつくと熊に食はれる——アイヌの金言ですよ、はッはは、約束は忘れ

ませんよ」

隣家まで聴えるやうな聲で、平塚は笑つた。

鋼鐵のやうにひきしまつた赭ら顔、針のやうな鋭い眼光、垢と脂でどす黒く光つてゐる羅紗の上着——あの人外境のやうな黒龍江アムールの河畔では、四圍の涼涼たる風景と溶け合つて、少しも異様には見えなかつたこの男が、ここではまるで場違ひの感じなのである。

古い商家の傳統をそのまま物語つてゐるやうな、この二階の一室が、ますます薄暗く、陰気なものに見えてきた。清六は、窓を開いて午後の陽を一杯に入れながら訊いた。

「福本さんはどうしなさつた？」

「年齢としですよ。天幕生活がやつぱしこたへたとみえて、持病の神経痛は起しましてな沿海洲から眞すぐ函館さ歸りましたよ」

「ほう、それは残念なことをしました」

「それで、僕ひとりでお邪魔に上つたやうな次第ですが、堤さん、あんた本當に、露領漁業さ乗り出す肚ですか？」

平塚は笑顔を納め、すばりと本題に入つてきた。

「はッは、嘘をつくと熊に食はれるさうぢやないですか。伊達や冗談で、あんたに御足勞をかけやしません」

清六は、軟らかな笑顔のままに續けた。

「おらも精一杯頑張りました。もう大抵の段取りはついてゐます。あとは、あんたの御協力を俵つばかりです」

「ほう。そりや早いことを……」

「新潟の叔父貴のお蔭です。資金もどうやら借入れましたし、『堤商會事務所』といふでつかい看板を、叔父の家の店先へブラさげてきました。船も買入れの商談中です」

「へえ、船を！」

「備船では思ふ存分使へませんから、いつそ一隻買入れることにしました。越前若狭の小濱に船籍のある寶壽丸といふ船です。日本出來の西洋型帆船で、おらも實地に檢分してきましたが、明治三十二年の新造で百六十三噸、格好もよくがつちりした船です。ただ、賣値の七千五百圓がちと大事なんで、目下叔父貴が値切りの最中といふわけで……」

清六は、いつになく齒切れのいい話し振りだつた。新潟での成果が一つ一つ楽しく心にうかんできて、それを言葉にするのがもどかしい位だつた。聽いてゐる平塚の面上に、ほの暗い影がさしたのにも氣がつかかなかつた。

「とにかく、來年はカムチャッカです！」

力強く、結論のやうにさう言つた清六の言葉を、平塚の重い聲音が刎ね返した。

「堤さん。それが、なかなか思ふやうにだば行かねえらしいですて」

「えッ、そりや何のこつてすか？」

耳を疑ふやうに、清六は聴き咎めた。

「漁業條約の細目が、まだ出来上つとらんです」

「と、いふと？」

「露西亞は、日本に漁業權を興へると約束しただけで、まだ正式の調印はする氣配がありません。戦後のゴタゴタで、露西亞も内政の整理に眼は廻してゐる鹽梅ですが、それにしても、肝腎の漁業條約はかうまで遅らすとは、どうも誠意がねえやうな氣もします」

「ふうむ」

「僕は途中、浦鹽斯德さ寄つてみたんです。いや日本の漁師も鼻息が荒くなりましたな、露西亞官吏へ膝詰談判です。みんな、來年こそと思つて、函館や青森さ鹽やアルコールば用意してる。船も頼み、漁夫も豫約してゐる。それなのに露西亞側では、う

んともすんとも發表せん。隊長格の郡司大尉——あの方はさすがに熱血漢ですな、手に爆弾でも握つてるやうな勢ひで、政廳へ乗り込んで露西亞官吏を叱りとばし、領事館へとび込んで野村事務官さ責め立ててゐますが、どうも目下の状態だば、早急に埒があきさうでもない様子でしたよ」

沿海洲を想ひ出させるキナ臭い露西亞煙草をブカブカ喫ひながら、平塚は言ふのだつた。

一つの波を乗り越へてほつとした途端に、また一つの大きな波が清六の頭上に襲ひかかつたのである。清六は眼を閉ぢた。胸に描いた計畫の一つ一つが崩されて行く思ひである。だが、打たれて弾むゴム毬のやうに、そのとき、不屈な精神が頭を擡げたのである。彼は眼を開いた。

「平塚さん、それでも我々はカムチャッカへ行かれねえといふこともありませんまい？」

平塚は、その言葉の意味を味ふやうに相手を覗めてゐたが、これも謎のやうにぼさりと答へた。

「そりや行かれんことはありません。カムチャツカは海續きですからな」

「はッは、いかにも海續きです。で、その方法は？」

「露西亞人名儀で、營業權ば獲得することです」

「ふうん、なるほど」

「表立つた經營者は露西亞人です。だども、實際の經營は、網一本買ふことまでがつちりと我々が握るんです。露西亞人は人形に過ぎません。——堤さん、このやり方は卑怯だと思ひますか？」

「いや決して！ 寧ろこのまま泣寝入りする方が、よつほど卑怯だ、臆病だかと思ひます。露西亞に反省を促すためにも、國民の熱意を示すためにも、この際、斷じて出漁すべきだと思ひますだが！」

「さうか！ 貴様、さう思つてけるか！」

泣きたさうな感激の表情で、言葉までがらりと變つた平塚が、飛び立つやうに膝を進めてきたのである。

「よし、やるべ！ おらば兄弟分にしてけれ」

「有難う、平塚！」

若さに燃えた四つの瞳が結びついた。

「おら、これからすぐ、浦鹽さ引返す」

「えッ？」

「名儀人にする露西亞人は雇はねばなんねえ。これでも片言ぐれえの露西亞語はしやべれるんだ、おらさ委して置け」

「でも、今すぐとはあんまり性急だ」

「早い方がいい。漁師に日待ちは禁物だ」

「ええから一晩泊つて行け！」

押問答の最中に襖があいた。茶道具と、山盛りにした粽ちまきの盆わんを持った糸子だった。だが、彼女にしてみれば、客の接待よりも、二階へ駆け上つたきりの夫のことが氣になつてゐたに違ひない。清六も、旅姿のままの自分に漸く氣がついて、からからと笑ひ出した。押問答もそれで立消えとなり、平塚もどうやら、一晩泊ることに肚をきめたらしい。

「ほう、これが越後名物の粽ですな。なるほど美味しい」

香ばしい笹の匂ひを堪能しながら、平塚はいくつも口へほうり込んだ。

夕陽を浴びた裏庭の柿の實が、名工の彫物のやうに美しい。晴れ渡つて深く青い空と、柿の朱さの対照。遠く彌彦の頂きも望まれて、窓の眺めも繪のやうな鮮かさである。

「結構な天長節でございます」

世辭のやうに糸子が言つたその言葉が、清六と平塚の胸に強くしみ通つた。

(さうだ、なんといふ有意義な佳節であらう)

(俺たち二人が固く結ばれた記念すべき日！)

二人の眼がそつと笑みを交はした。希望と喜びが、大きく胸に溢れてきた。

そして、盆の粽がやがて大半片づけられた頃、活潑な足どりで階段を上つてきたのはヨシだった。娘ざかりの丸顔を上氣させて

「兄にやさ、電報がきました」

渡すと、平塚の存在が眩しさうに駆け下りて行つてしまつた。

「新潟の叔父貴からだ！」

電報を読む清六の手がすこし顫えた。

——ホウジユ〇六五〇〇デキメタ。

「寶壽丸、六千五百圓できめた。もう一度讀むぞ、寶壽丸、六千五百圓できめた！平

塚！船が手に入った！」

船は北へ

濃い霧が海を包んでゐた。

明治四十年六月下旬である。

北海道東端根室の沖合を、一艘の帆船が、北々東へ針路を向けて駛つゐた。

主^{メインマスト} 檣の五枚の帆、後^{アフターマスト} 檣の二枚の帆が、順風を受けて、はち切れさうに膨らんでゐる。堅牢さうな黒塗り船體に、くつきりと鮮やかな白線が走り、船尾には「寶壽丸」の三字が、雄渾な書體を躍らせてゐる。

そして、北海のうねり波を、銘刀のやうに切り裂いて行く船首には、一個のとてつ

もなく大きな天狗の面がぶら下つてゐた。

高い鼻、鋭い眼、鬪志の塊まりのやうなその面魂——それはおそろくこの船の、いや、この船の乗員すべての守護神^{マスコット}なのであらう。意志の象徴なのであらう。

絶え間なく風を受け、飛沫を浴び、時には氣まぐれな大濤にその全面を没しながらも、嚴然として眼ばたき一つしない。生あるものの如く、行手を凝視しつづけてゐる。

寶壽丸は、この守護神に導かれるやうに、龍骨^{カイヌ}を軽く軋らせて快走した。

この船！この無名の百六十噸の無動力帆船！だが、この船にこそ、十數年後に、日本の漁業を世界第一の地位に押し上げるべき逞ましい原動力がひそんでゐたのだ！
事業主、堤清六。

最大の協力者である平塚常次郎。

この二人を中心とした總數三十五名の乗組員であつた。老練な船長増野時次郎を船

員側の代表者とすれば、漁夫の元締格は高橋榮吉であつた。平凡な及物商だつた高橋榮吉——彼も遂に舊友清六の熱情に動かされ、敢然としてカムチャツカ行の壯舉に參加したのである。

寶壽丸は、多くの人々の努力の結晶ともいふべきであつた。一本の索具、一枚の船板にも魂が籠つてゐた。殊に、船艙にどつしりと積まれた漁網や漁具、鹽、砂糖、茶アルコール、麥粉、米、味噌などの食料品は、清吉老の捨身にちかい努力の賜であつた。一掴みの鹽もおろそかにはできなかつた。

天狗の面の守護神を思ひついて、それを新潟一の彫物師に彫らせたのも清吉老である。

「やれやれ、これで一安心ぢや。なアに心配は要らん。清六め、きつと頑張つてくるこつた」

温和しい父吉平の氣をひき立てながら、新潟の埠頭で、寶壽丸を見送つてくれた清

吉老の姿が、ありありと清六の眼にうかぶのである。

そして、三條の雁木の町で、ひつそりと自分の歸りを持つてゐるであらう母や妹。氣丈さうでゐながら、出立のときにはやつぱり涙を見せてしまつた妻の糸子。——みんな、希望よりも不安に胸をとざしながら、千五百哩の海を渡る自分の無事を祈つてゐることであらう。

(よし、頑張るぞ！)

故郷の土が遠去かれれば遠去かるほど、その覺悟が強くなつてくるのだつた。目指すカムチャツカが、確實に、近付きつつあるからだつた。

「あと何日かかるかのう？」

一語に船橋に立つて、行手を眺めてゐる平塚へ、清六は訊いた。

「ははは、急くな急くな。一昨日、船に乗つたばかりでねえか！」
平塚は笑つた。

寶壽丸が新潟の埠頭を離れた頃、清六と平塚は陸路を函館へ急いでゐた。函館の露西亞領事館から、沿岸買魚許可を受けるためであつた。六十八留の金でその許可證を買ひ、漁區の指定をして貰つた。

平塚の要求した漁區はウス・カムといひ、カムチャツカ東海岸中央部の、最も有望を謳はれる漁場だつたが、それは一蹴された。露西亞官憲は、それより遙か北方のプラン・コルフ行を主張した。押問答の最中に、新潟からの寶壽丸が入港してきた。既に六月下旬、漁期は遅れてゐる。

「ままよ、プラン・コルフでもシンガポールでも構はねえ！」

解らず屋の露西亞官憲へ捨臺詞を叩きつけ、浦鹽から雇つてきた名儀人——樫の大木のやうに鈍重な露西亞人ウラソフを連れて、清六と平塚は寶壽丸に乗船した。即日出帆だつた。そして、それからまだ二日しか経つてゐないのであつた。

「さうだつたのう。おら、なんだかもう一と月も船に乗つたやうな氣がしての。まだ

るつこくて仕様がないわ」

清六は、平塚を顧みて、テレ臭さうに呟いた。

「まつたく。魚は、おらたちの行くのば待つてくれねえからなア」

平塚は、わざと清六の焦慮をかき立てるやうにそんなことを言ひ、またからからと笑つた。

霧は、霽れてはかかり、薄くなつたり濃くなつたりした。無數の細かい水滴が、紗の目のやうな密度で、眼路のすべてを押し包み、絶え間なく流れてゐた。清六の烏打帽の底からも、平塚の潰れたやうな船員帽の底からも、ぼたぼたと滴が垂れ、お揃ひのやうな古背廣の上着を傳ひ、長靴の先にしたり落ちたり落ちてゐた。

連れて行くから

髪結ひ直せ

旅は辛いと

泣かぬよに……

哀調を帯びた追分節が聴えてきた。手摺に倚つて海を眺めてゐる漁夫たちの群のなかからだつた。胸にしみるやうな聲であつた。

「あれが、花咲の岬でがす」

操舵室から出てきた増野船長が、ぼそりとさう言つて左舷を指さした。霧の底に、薄煙のやうな一抹の陸影があつた。

「いよいよ、北海道ともお別れといふ譯か」

「さういふがんですのう。明日千島に沿つて北を走ります」

心なしか、足許の波が、じらりと大きく揺れたやうな気がした。今、日本本土と別れつつあるのである。行手の大平洋が、俄かに茫漠とした廣さで迫つてきた。

帆綱が軋る。怪鳥の羽ばたきのやうに帆が鳴り、檣の振幅が加はる。

「こりや、一と荒れくるかも知れませんでのう……」

増野船長の皺だらけの顔が、ぐいと、雲行きの早い中天へ振り向けられた。追分節も、いつか途絶えてゐた。

二

清六は船に弱い方ではなかつた。三洋丸で沿海洲を往復したときも、飯が食へなくなるといふことはなかつた。殊に、こんどの航海は、双肩にかかつた重い責任に支へられたかたちで、船酔いのことなど、考へてみやうともしなかつたのである。

それが、完全に參つてしまつた。

北洋の怖しさを、これでもかこれでもかとはかり味はされてしまつた。

まる二日、蠶棚のやうな寝臺に臥たきりであつた。しまひには苦痛も麻痺してきて北洋の底知れない威力に對して、敬意にも似た感じさへ抱くやうになつた。

日本海の波濤とは比較にならなかつた。船は恰度、のたうち廻る鯨の背にのつた小

魚のやうに翻弄された。帆布は破れ、船具はとび散つた。甲板を洗ふ海水が、容赦なく船内にまで流れ込んできた。夜も盡もなかつた。強いて名付ければ、それは「時化の時間」とでもいふべきであつた。

清六は、漸く人心地がついてきた。北海道を離れてからたしかに二日経つたことだけは判つてゐた。船窓にいくらか明るみがさし、動搖がめつきり減つたやうな氣がした。彼は、低い寢臺の天井に幾度も頭をぶつけながら、起き上り、床の上へ足をおろした。だが駄目だつた。擲はれたやうによろよろとなり、寢臺の中へ倒れ込んでしまつた。

向ひ側の寢臺から平塚が、にやにや笑顔を見せてゐた。その顔も塗つたやうに眞蒼だつた。海で産湯をつかつたやうなこの男まで、やつぱり船酔をするのだ。さう思ふと清六は何か救はれたやうにホツとした。

「清さん、ちつた元氣がついたかね？」

高橋榮古が、さう聲をかけて入つてきた。兩腕の間に、越後名物の梨をどつさり抱へ込んでゐた。

不思議なことに、この乃物商の高橋が、熟練した水夫とひけをとらないほど船に強いのであつた。清六は舌を捲いてゐた。何か腹立たしい感じでさへあつた。

「高橋君、君はよつほど胃袋が丈夫だがだね」

言ひながら、清六は起き上つた。頭の芯がまだ朦朧としてゐた。酸っぱい水がこみあげてくるのを、ぐツと奥歯で噛みこらへた。

高橋は微笑しながら、お手のもの乃物で梨の皮をくりくり剥いてゐた。格好よく剥いた梨を黙つて清六にさし出した。

腹が空いてゐるくせに、まだ飯を食ふ元氣はない清六にとつて、梨はまさに絶好の食物だつた。それを相手に見すかされたやうで癪だつたが、あんぐり食ひつくつとあとは夢中だつた。世の中に、これほど美味しい物があつたかと思ふほどだつた。二日間の

絶食でからからになつた胃の腑に、甘い汁が慈雨のやうにしみて行つた。

「堤！ どうやら露命ばつないだな」

平塚が、寢臺から聲をかけた。

「違ひねえ。汁の命だからなア」

清六は笑ひながら、ぼたぼたと汁の垂れる食ひかけの梨を、平塚の方へ差し出して見せた。

「どら、おらにもけれ」

我慢ができなくなつたやうに、平塚は梨を一つ掴み取つた。そして皮ごとバリバリと噛みはじめた。

かうして二人の首領が元氣を取り戻すと同時に、さしもの荒れくるつた天候も恢復しはじめた。根強い長逗留をつづけてゐた低氣壓が、漸く御輿をあげて北へ移動しはじめたのである。時刻は午後だつたが、まるで夜が明けたやうに、船の中が賑やかに

なつてきた。甲板を馳け廻る船員たちの足音。漁夫たちの活潑な笑ひ聲――

清六と平塚は、甲板へ出た。

恰度、増野船長が船橋から下りてくるところだつた。

「やア、しばらく！」

平塚は、冗談でもなくさう言つてお辭儀をした。船長も釣り込まれたやうに、「しばらくでがす」

と、慰勸に頭をさげた。そして三人で、胸が空っぽになるほど笑ひ出した。

船内の破損個所が、敏速に修理されて行つた。思つたより破損が少いのは、船が全然無抵抗に翻弄されたからであつた。甲板などは、どんな掃除の名人たちが何時間かかつても不可能なほど、見事に清掃されてゐた。

張り更へられた帆に微風を孕んで、氣取つた伊達男のやうに軽く船體を傾斜させて寶壽丸は快走した。嵐の直後で、うねりはまだ高かつたが、空はぐんぐん霽れて行つ

た。

誰が思ひついたのであらうか、風呂を立てやうといふことになった。時化あとの一浴びは、思つただけでも快よいことであつた。みんな、汗と潮風で、べとべとになつた體をもてあましてゐるところだつた。

勿論、貴重な清水には手をつけられなかつた。甲板へ持ち出した粕焚釜につき込まれたのは、帆布に降りたまつた雨水だつた。忽ち、この原始的な甲板風呂に湯氣がのぼりはじめた。

「親方、親方！」

「親方が先に入つてくれないと困ります！」

甲板の上で、とんだ鬼ごつこがはじまつた。鬼は清六と平塚で、追ひかけるのは漁夫たちだつた。

「おらはいいよ、おらたちはまだ船に乗つたばかりだから。お前たちこそ新潟から

の長航海で穢れてゐるこつたろ。お前たち入れ、お前たちが先に入れ！」

到頭、舳の一角に追ひつめられた清六は、ハアハア息を切りながらさう言つた。だが、漁夫たちは、容赦なく清六の上着に手をかけて卸を外しはじめた。清六も平塚も仕様ことなしに、まるで叱られた駄々子のやうに、しぶしぶと裸になるのだつた。

釜に浮かせた板切れに體を乗せて、二人の親方はすつぽりと顎まで湯につかつた。

「みんな、いい奴等だ。こつたら氣質のいい漁夫は、おらの経験でも初めてだ」

がつちり緊つた、無駄肉のない黒い腕で、首筋を洗ひながら、平塚は呟いた。

清六の肌は、平塚に較べると、女性的なほど白く、雪國生れの證據を示してゐた。

彼は、金太郎のやうな櫻色に童顔を染めながら、うつとりと海を眺めて呟くのだつた。

「あアいい氣持だ。まるで故郷の家で行水を使つてるみたいだ。はッはは、かうして見ると太平洋が庭の泉水のやうな氣がするぞ！」

「泉水はよかつたな。泉水のつもりで呑んでかかるべし！」

二人は、釜が揺れるほど、大きな聲を出し合つて笑つた。

船員、漁夫の入浴が一通り済むと、清六は甲板の真中へどつかりと大胡坐をかき、周囲を漁夫で取り圍ませた。若白髪を漁夫たちに抜かせやうといふのである。

「一本につき一錢だぞ」

それが報酬だつた。だが、追ひ追ひと抜かれて残り少くなると、

「一本につき三錢！」

に刎ね上つた。

「五本抜けば焼酎コ一罎買へるてバ」

漁夫たちはわいわいといふ騒ぎだつた。

清六じつと眼をつぶつて頭を漁夫たちに委せながら、意外な白髪の多さに自分ながら呆れるのだつた。凡そ一年間の勞苦——寶壽丸をこの洋上へ走らすまでの勞苦の一

つ一つが、夢のやうに臉を過ぎて行つた。

「こらッ、貴様ベテンだぞ！」

白髪でなくて、本物の黒い髪まで抜かれる段になつて、さしもの白髪抜き作業も漸く終りを告げた。

清六は、胡坐をかけたそのままの姿勢で、ぐるりと圓陣を描いた漁夫たちに向ひ、一場の演説を試みた。いや、それは演説などといふ鹿爪らしいものではなかつた。家の爐端で、夕食後にする世間話のやうな和やかさであつた。

「……おらも漁師だし、お前たちも漁師だ。みんな此の腕一本が資本なんだ。みんなが雇ひ人であり、そして又、みんなが親方なんだ。言はれてするやうな三助根性は海へ抛り込んで、影も日向もなく、一生懸命やらうぢやないか。かうして同じ船に乗り合せたのも何かの縁だ。千里の波を越へて來たからにや、魂を一つにして倒れるまで頑張らうな。その代り、儲けた利益は、誰一人の差別なく公平に分けることにしよう

……」

澄み徹つた聲であつた。朴訥な口調であつた。真心の泉のやうに、それは漁夫たち總ての胸へしみ渡つて行くのだつた。

「あッ、カムチャツカだ、カムチャツカだ！」

漁夫の一人が、頓狂な聲とともに匆ね上つた。忽ちどやどやと立ち上り、左舷の手摺へ馳け寄る足音が甲板をうづめた。

左舷遙かに、橙色の夕陽を浴びて、團雲の一きれのやうな陸影が現はれてゐた。久方振に灼きつくやうな陸影であつた。

「あッははは」

人々の昂奮を断ち切つて、爆發するやうに笑ひ出したのは平塚だつた。

「あれがカムチャツカだと！ はッはは、みんな寢呆け眼ばよく擦れ！ あれはカムチャツカぢやねえ、千島だど！」

漁夫たちはハッと聲を呑んだ。

「みんな、根室ば越して何日目だと思ふ？ まだまだ、カムチャツカば見るまでにやこんどみてえな大時化ばもう二つ三つ喰つてからだと思へ！」

漁夫たちは、テレ臭さうに顔を見合せながら手摺から離れはじめた。カムチャツカといふ異郷の遠さ遙けさ——清六が千里の波と言つた海の旅の長さが、改めてしみじみと漁夫たちの心に思ひ知らされたのであつた。

たつた一人、手摺から離れずに、ちつと海を瞞めて突つ立つてゐる男がゐた。六尺豊かの、見上げるやうな巨體は、像のやうに動かなかつた。無表情な白っぽい顔に、睡つてゐるやうな灰色の瞳がどんよりと瞳られてゐた。それが、名儀人として、浦鹽から雇はれてきた露西亞人ウラソフであつた。」

七月上旬。

九〇

寶壽丸は、ペトロバブロスクへ入港した。

ペトロバブロスク——ここは言ふまでもなくカムチャッカの首府であつた。

そして寶壽丸の人々にとつては、清六と平塚を除いて、最初に見る外國の土地であつた。寶壽丸から卸された傳馬船は棧橋に着いた。上陸した漁夫たちは、足の裏が擦つたいやうな顔で、しばらく佇んでゐた。久し振りの土の感觸——といふよりも、それが外國の土であるといふことに、何か馴染めない躊躇を感じるのであつた。

赤い屋根、教會の鐘樓、煉瓦の壁、丸太造りの民家、そして平坦な掃除された街路——それらは、まるで何かの繪葉書で見たやうに西洋臭かつた。だが、この小ぢんまりしたハイカラな街を、三方から押し潰すやうに迫つてゐる山々を見たとき、人々ははつきりと、

(ここはカムチャッカだ)

と印象づけられねばならなかつた。

山々は、鬱蒼たる原始林に包まれてゐた。蝦夷松、トド松、その他の針葉樹を主として緑の堆積が、涯もなく續いてゐた。そしてその向ふには、雪を載いた火山山脈の峻線が、氷の壁のやうに連なつてゐた。たしかにそれは、日本内地では見ることのできない雄大な景觀であつた。

雄大といへば、街を歩いたり店先に突つ立つたりしてゐる露人男女の體格もさうであつた。彼等の風貌は、土地から滲み出したやうにがつしりとしてゐた。竝べるのが恥しいほど、日本人は小粒に見えた。

清六と平塚は、漁夫たちを海岸近くに休ませると、ウラソフを連れた三人だけで、肩を張り拳を振りながら街の中へ進んで行つた。住民の視線が八方から集まつた。敵意とも輕侮ともつかぬ複雑な眼の色だつた。民家の奥から顔を覗け出す老婆もゐた。巨大な露西亞犬が、むつくりと體を起して後についてきた。だが、清六と平塚は毅然

として、いや寧ろ清六などは、その口邊に溫和な微笑さへうかべながら、大股に、だらだら坂の一本道を登つて行つた。

函館で受けた沿買魚許可證に、市廳の裏書をして貰ふのが用件であつた。」

市廳は、坂のてつべんに、港を一眼で見下す位置に建つてゐた。

虎髯を立てた老獺さうな役人は、ウラソフの差し出した沿岸買魚許可證を受け取ると、矢鱈に巻煙草をふかしながら、二人の日本人に何かしやべり出した。

勿論、清六には意味が判らなかつた。嚴重に規則を守れとでも言ふのであらう。平塚が考へ考へ怪しげな露西亞語で應答すると、役人はよしといふ風に頷いてみせた。そして、沿岸買魚許可證の裏面へ、大きなゴム印を三つばかり、べたべたと押してウラソフへ突き返した。

それで用件は済んだわけであつた。清六はさすがに疲れがでてきた。市廳を出ると港の一角に碇泊してゐる寶壽丸の姿が、玩具のやうに小さく眼に入つた。二十日あま

りの辛い航海が思ひ出された。體には、まだ船に乗つてゐるやうな動搖感があり、足が土についてゐないやうな氣がした。

「平塚君！ おい平塚君ぢやないか！」

三人はぎくりと立ち止つた。

そのしやがれた蠻聲のとび出してきた場所は、この市に二三軒ある日本人商店の一軒、沼田商店といふペンキ塗りの看板がかかつた店先であつた。

平塚は二三歩近づいて行つた。そして、

「あッ、郡司大尉殿！」

と、頓狂な聲を出した。

胡麻鹽頭の、四角い顔をした中老の日本人が、微笑もせず三人をキッと見てゐた。

「大尉殿、やつぱりあんたは、ここさおいでになつとられましたな！」

平塚は、喜びに顫える聲だつた。

「うーん、浦鹽にばかりゐても埒があかんのさ。少し、この市の役人共の脂をしぼりに来たんぢやよ！」

郡司大尉は初めて笑顔になり、三人を店の中へ招じ入れた。

「浦鹽では色々どうも……」

挨拶してから、平塚は清六を紹介した。

「越後三條の産で私の親友、堤商會主の堤清六君です」

「やア、僕は報效義會の郡司成忠です」

清六は固くなつた。郡司大尉——彼にとつて、それは偶像にも値する偉大な名前ではないか。明治二十六年春、郡司大尉を指揮者とする報效義會の四十餘名が、數隻の短艇に分乘して隅田川を出帆し、遠く千島探險の途についた壯舉は、すべての國民を熱狂させたものである。だが、清六の場合は、單なる熱狂ではなかつた。當時漸く青年期に入り、早くも海外發展への鬱勃たる熱情を胸に抱きはじめてゐた彼にとつて、

それは譬へやうもない感動であつた。異常なる關心を以て、彼は四十餘名の同志のその後を見守つた。——幌筵島片岡灣に於ける越年、苛烈なる自然との闘ひ、疾病不遇。熱し易く冷め易い國民は、いつの間にか、北邊の一角に嘗つての隅田川の勇士のゐることを忘却してゐた。

資本の缺乏と世人の無理解のため、手廣く企畫された遠洋鱈漁業も失敗に歸し、明治三十九年遂に報效義會は解散した。雄圖空しく孤島に病歿した人々の魂は、ただ一基の「志士之碑」となつて片岡灣頭に残るのみであつた。そして、これより先、日露戦争勃發するや、郡司大尉は勇敢にもカムチャツカの召領を目指し、占守島からロバトカ島に渡らうとしたが、不幸露西亞官憲のため捕へられ、ベトロバプロスクの牢獄に監禁されたのである。だが、大尉は脱獄逃走した。一隻のボートに生命を托して、占守島に逃げのびることを得たのである。

大尉の烈々たる愛國心は、その頃から北洋へ半密漁的に出漁してゐた日本人漁業家

の間に、最もよく感化されて行つた。大尉自身も遠洋鱈漁業の計畫を捨て去つたわけではなかつた。大尉はいつの間にか、日本漁業家の私設取締役のやうな形になつてゐた。——日露漁業條約の調印實現を迫り、鐵火の意氣を以つて浦鹽政廳に交渉したのも、今また遠路を冒して、嘗ての囚はれの地ベトロバロスに現はれたのも、みな日本漁業の家意志を代表し、彼等の保護者となり道案内者とならうとする熱情の現はれに外ならないのであつた。

偉大な北洋の先覺者！

清六は、いまその人を眼前に見たのである。

報效義會は解散してゐても、「報效義會の郡司です」と言ひ切れるのは、この人の心底に、報效義會の精神がなほ烈々として留められてゐる證據でなくて何であらう。辛酸を物語る夥しい額の皺、意志の象徴のやうな一文字の眉、高い鼻梁、厚い唇を蔽ふ豊かな口髭——その割に穩やかな眸が、ちつと清六に据へられてゐる。

清六は、自分がひどく時代遅れのやうな氣がしてならなかつた。相手の郡司大尉に對しては勿論、この異郷に店舗を張つて、雜貨や漁道具などを夥しく店先に陳べてゐるこの沼田商店そのものの存在にさへ、先驅者に對する異敬の念を拂はずにはゐなかつた。寶壽丸の航海中、自分ながら偉大な探險家でもあるやうに思ひ上りかけてゐたことを、清六は、恥しい氣持で反省するのだつた。

「よくやつて来てくれた。本當に、よくやつて来てくれた。今年は、ひよつとすると誰も來んのぢやないかと思つとつたが、僕は、あんたの顔を見て安心しましたぞ」

郡司大尉は、清六と平塚を半分に見てさう言ひ、チュウと美味さうに溢茶を吸つた。鹽分がピリリと舌先に感じられる溢茶だつた。

「條約は神聖ぢや。——露國は日本海、オホーツク海、ベーリング海に面する露國沿岸に於ける漁業權を、日本臣民に許與せんがため日本國と協定せんことを約す——この小村・ウイッチの神聖な協約があるに拘らず、露國はまだ條約調印の誠意を示さんの

ぢや。實に遺憾ぢや。しかし、このままの泣寝入りは絶対に許されん。たとへ露人名儀の買魚營業でもいい、この際敢然と出漁することが、露國政府に反省を促すこととなり、日本漁業家の熱意を中外に示すこととなる。誰でもいい、堂々とカムチャッカへ渡つて来てくれんものか。僕はこの店で無駄飯を食ひながら、毎日沖を眺めて待つて居つたのです」

大尉の聲は顫えてきた。嘗て、東京灣頭で國民の歡呼に答へて——あのときのやうな、逞ましい希望に燃えた眸であつた。

「寶壽丸、寶壽丸か……堤君、いい名前ですなア」

大尉は瞑目して、ぼつりと言つた。

「堤君、平塚君！ あんた方の努力は決して無駄ではありませんぞ。いや、僕の眼の黒い限り、無駄には終らせん！」

「……………」

「來年はきつと直營が出来る！ こんな傀儡に等しい露人を連れて來んでも、きつと日本人だけの漁場が出来る。買魚ではなく、堂々の權利に於て魚を獲ることが出来る！ どうかその自信を以てやつて來て下さい」

目指す漁區がバラン・コルフと聞くと、大尉は、溢茶をバツと三和土に捨てて立ち上つた。

「そらいかん。早く出發せんと、漁期に遅れて了ふぞ！」

大尉はまるで船橋に立つた船長のやうに、北方の空を指さして叫ぶのだつた。

三人が、挨拶を述べて店先を辭し去ると、途中まで見送つてきた郡司大尉は、清六の肩越しに低く囁いた。

「堤さん。やがて罐詰時代が來ますぞ。魚の罐詰です。それを忘れんやうに……」

謎のやうな言葉であつた。罐詰——その二字は、大きな疑問符とともに、清六の腦裏に深く刻み込まれたのである。

「偉い人ぢや。平塚、郡司大尉つて、偉い人ぢやこてのう……」
寶壽丸の船縁に立つてペトロパブロスクの市街を眺めながら、清六はしみじみと呟いた。

午後七時——しかし内地では午後四時頃のやうな、透徹した日光が、原始林の山を街を、海をあたためてゐた。

飲料水と、食料品の積込みは快速で行はれた。寶壽丸は即時錨を捲き、線帆に風を孕ませて、針路を北に出帆した。

クルチーフスカヤの麓

—

七月十一日——といふ文字が、増野船長の航海日誌ロッキンブックに記されてゐた。

寶壽丸は、カムチャツカ河の河口に向つてゆつたりと近づいて行つた。

「 balan・コルフだ！」

と、誰かが叫んだ。

朝であつた。乳汁のやうな濃い霧が、南風に吹きまくられるやうに霽れて行つた。だが人々の眼にまづ映つたものは、カムチャツカ河の帯のやうな流れでもなく、その河畔に小ぢんまりとちらばつてゐる三十二戸の村落でもなかつた。

「あッ、あの山！」

思ひがけぬ高さに——雲の上に、突兀と聳え立つてゐる尖峰。しかもその頂點からは、灰色の煙を太い綱のやうに噴き放つてゐる。

「クルチーフスカヤだ。カムチャツカ一の高いお山だ……」

と、増野船長は、海圖と見較べて呟いた。

三角定規を突き立てたやうな圓錐體だつた。少しの膨らみも歪みもなく、頂から麓

まで一直線に引き下された稜線は、單純であるだけに凄狀であつた。何の裝飾もない石碑のやうな無表情で、カムチャツカの自然の表徴であるクルチーフスカヤは、超然と空を突き上げて聳え立つのである。

「富士山より高いべか？」

「うん、高いかも知れねえなア」

漁夫たちの嘆聲の裡に、寶壽丸は帆を卸した。下船準備が船内に傳へられた。新潟出帆以來四十八日、千五百八十哩の航海が、ここに終りを告げたのである。

兩舷の錨は、印象的な音を立てて落下された。舳の龍骨が砂に觸れる音がした。蟹のやうに泡を立てながら、雪解け水にふくらんだどす黒い流れが、寶壽丸の船腹を叩いた。磯波に崩された赤土の岸と、海へ這ひ出すやうに伸びた草原とが、竿一本ほどの近さに迫つてゐた。

その頃になつて、人々は漸く、獸皮を張つた民家の屋根々々を發見した。その屋根

々々を縫ふやうに、干鮭ネクラの乾小舎バラカンが續いてゐた。小舎といつても、それは粗雑な豆細工のやうな、細い丸太材の組合せに過ぎなかつた。多數の干鮭ネクラが、ぶらぶらと梁の間に揺れてゐた。土民たちが、放心したやうに寶壽丸を眺めてゐた。それは、顔色の白い、やや西歐的な感じのするカムチャダールの群であつた。

沿海洲よりも、もつともつと荒涼とした眺めである。世界の涯である。

だが、ここには、何か人を惹きつけるやうな魅力がある。川の音一つにも精氣が籠つてゐる。仕事が出来さうだ。

清六はさう思つた。

守護神マスコットの天狗の面は、安心したやうにその鼻先をこころもち海面に向けて、ぐつたりと舳にぶら下つてゐた。長途の航海を物語るやうに、その顔は鹽で眞白だつた。

それと對照的に、黒々と潮灼けのした漁夫と船員は、上陸の歡びに厚い胸を躍らせながら甲板を馳け廻つた。船艙の口が開かれ、荷物を陸揚げする準備が進められて行

つた。

傳馬船が卸され、清六と平塚とウラツフが、タラツプを傳はつて乗り移らうとしたときである。

鳥を思はせる奇妙な聲が、突如として人々の注意を奪つた。

河口の方から、丸太のやうに流れ出てきたのは、原始的な格好をした一艘の獨木舟であつた。磯波に乗つて、巧みに操る櫂と、漕手の白い顔が見えた。舳には一人の大男が、手を振りながら、鳥のやうな聲で何か叫びつづけてゐた。

(待て、といふのだ)

それは誰にでも判つた。人々は手を止めて、近づいてくる獨木舟を見守つた。

「村長だべ」

平塚は、タラツプへ踏み卸した足を甲板に戻すと、清六を見てニヤリと笑つた。俺に委せて置け——さう言つてゐる微笑であつた。

「村長」はタラツプにとびつくと、二三段を一跨ぎにして甲板に上つてきた。露西亞の古い軍服を着てゐるが、明らかにカムチャダールであつた。精一杯の威厳を示したつもりであらうが、その膨れた胸に輝く鍍金の怪しげな勳章は、平塚を微笑させるに充分であつた。

「村長」はウラツフを見ると、トルコ帽に似た黒い帽子を脱ぎ、従屬民としての禮儀に相應しい町重な一禮をした。そして、平塚を振り返ると、わざとらしくギョロリと眼を剝いて訊ねかけた。

「汝は何者なりや？」

それは、平塚でも充分に相手に出来さうな、まづい露西亞語であつた。

「我は、日本人ヒラツカなり。そこに居る人間は、我々の首領ツツミなり。汝の名は？」

「コスイギン。ウス・カム村の村長なり。汝等は何のために此の土地に來りたるもの

なりや？」

一〇六

「我々は、露西亞政廳の許可を得て、貴村漁場に於ける買魚營業をなす者なり」

問答を交しながら平塚は、コスイギンを、船橋の下のサロンへ導いて行つた。彼を驚かせたのは、コスイギンが「バロン・コルフ村の村長」とは言はず「ウス・カム村の村長」と言つたことであつた。

(さうか、此所がウス・カムなのか！)

彼はコスイギンの肩越しに、そつと眼下の部落に視線を流した。

ウス・カム！

それこそは、彼が函館の露西亞領事館で、官憲と押問答をした問題の地名なのだ。

長友福本萬作が、カムチャツカーと折紙をつけた優良漁區なのだ。

(しめた。神様のお導きだ)

だが、平塚はさりげない顔付きで、懇懇にコスイギンをサロンの椅子につかせた。

そして、恰度そのとき甲板を通りかかつたコックを呼びとめて、何かを小聲で命令することを忘れなつた。

沿岸買魚許可證が、ウラソフに依つて卓上に置かれた。勿體らしく手にとつて見る

コスイギンの顔色が果して變つた。

「バロン・コルフ！」

彼は呟いて、ちろりと平塚を見上げた。だが、その眼が、忽ち深い笑ひ皺にかくされてしまつた。コックが、半打の酒罎を盆に載せて運んできたのである。野菜と卵と強すぎる胡椒をあしらつた即席料理が眼の前に置かれた。魅惑的な音を立てて栓が抜かれた。コスイギンが獅子ツ鼻を近寄せて嗅いでみるまでもなく、強烈な生のアルコールの匂ひが、ぶーんとサロン中に放散した。

「バロン・コルフなる土地は……」

コスイギンは、四十五度の角度で罎を唇にあてがひ、殆ど音もなく中の液體を吸ひ

一〇七

取ると、息もつかず二本目に手をかけながらしやべりはじめた。

「……當地より遙北方にあり。岬をいくつも廻りて進めば、カラギンスキーと稱する島ありて、その對岸の灣こそバロン・コルフなり……」

二本目が空になつた。三本目は、さすがに速度が落ちた。

「……汝等は、方角違ひをなしたるなり。重大なる誤ちなり。この沿岸買魚許可證に依つては當地への上陸を許すことを得ず。然れども、然れども……」

眼の縁が、漸くほんのりと赤らんできた。平塚の語學では意味が聞きとれないほど舌先がもつれて來た。

「……今回は特に、漂流したるものと見做して、全員の上陸を黙認すべし」

言ひ終ると、三本目のアルコールが、ごくんと音を立てて腹の中へ落ち込んで行つた。フーツと潮吹きのような息を吐くと、コスイギンは椅子から立ち上つた。満足の意志を表現する、兩手を擴げ肩を竦める身振りをすると、彼は少しも變らぬ足どり

甲板へ踏み出して行つた。勿論、残りの三本をそのまま卓上に置くほど善良ではなかつた。さすがに羞恥に似た薄笑ひをうかべながら、それを左右のポケットへ捻ぢ込むと、彼は、上船したときと同様、タラップを二三段づつとび下りる早業を見せて、獨木舟に乗り移つた。

「敵ながら天晴れな奴だ」

獨木舟が川波を蹴立てて小さくなるのを見送りながら、平塚と清六は聲を揃へて笑つた。

ほつと緊張から解かれた船員と漁夫たちは、活潑に掛け聲を揃へて揚荷を開始した。木材や、天幕や、水樽や、そして何か中身の知れぬ雜貨の數々が、傳馬船の吃水をすつしりと沈めて、次々に陸へ搬ばれて行つた。

忽ち、河口近くの草原の眞中に、「ヤホンスキー日本人の小屋」イスバーが、真新しい天幕を夕陽に輝かせながら建設されて行つた。

犬の多い村は鮭が豊富である。

清六は、嘗て三條の家の二階で讀んだ北洋漁業關係の書物の中に、そのやうな文句が記されてゐたことを想ひ出した。

一年の大半を雪に降り籠められ、雪原の上を犬櫓に依つて移動し、狐や熊や黒貂を狩獵して暮す土民たちにとつて、犬こそが命から二番目に大切な財産なのである。犬の唯一の食料は干鮭であつた。それはまた土民たち自身にとつても主なる食料であつた。彼等は、それを確保するために、夏期中鮭の來游の多い河畔や海岸に集まり、營々として鮭を獲り干鮭に製造するのである。

ウス・カムの村は、犬の吠聲に明けた。

旅疲れの深い睡りは忽ちに破られた。

思ひがけない目覺時計に驚きながら、漁夫たちはのそのそと天幕から這ひ出した。だが清六の耳には、その姦ましい犬の吠聲が、天來の美音のやうにさへ聽えるのであつた。

クルチーフスカヤはまだ見えなかつた。

しかし朝霧はしだいに霽れて行つた。内地の風景を見馴れた者にはあまりにも廣漠として掴み所のない大自然が、徐々に覆面を脱ぎながら、壓倒するやうに迫つてきた。

荒削りの丸太で組み上げた小舎や、草と泥で塗りがためた茅屋の群だつた。思ひきり丈を伸ばした雑草に、蔽ひ隠されてしまひさうな鮭の懸棚が立つてゐた。骸骨のやうな木組みが、寒々として無氣味だつた。すべてが、昨日寶壽丸で見たときよりも、身近く迫つただけに陰氣であつた。

住民たちも、これらの風景に相應しい人々であつた。愚鈍そのもののやうな女子供

熊のやうな髯にうづまつた男の顔。榮養不良な白髪のお爺。そして、滅び行く民族に共通した統一のない思ひ思ひの服装。馴鹿トトカイの皮で作つた裳スカートに、ガラス玉の裝飾をつけた若い娘もゐた。おそらく彼女は村一番の美人なのであらう。

清六と平塚と高橋榮吉は、カムチャツカ河の河畔に立つた。

黄色い水が、兩岸を押し分けるやうに、渦を巻いて流れてゐた。灌木の疎林は水中へ半ば姿を没したり、削られた根を生々しい白さで崖にむき出したりしてゐた。比較的平坦な、砂地になつた個所には、昨日コスイギンが乗つてゐたやうな獨木舟や、鰻節のやうに無細工な格好をした漁船が、抛り出されたやうに竝んでゐた。

平塚は、夥しく襲ひかかる蚊を追ひながら、河岸の一角を指さして言つた。

「堤。あの網は見てみる。ここらの土人は、あつたら粗末な網で魚は獲つとるんだど」

「うん成程。まるで糞網みたいだの。あんな網で獲れるほど、この川口にや魚がいつ

ばいこと上つて来るこんだろ」

「手網で掬つたり、ヤスで突いたりか。土人より、熊の方がよつほど鮭獲りが巧いこつたべ。はッはは」

はるか上流では、平塚の冷笑を買つてゐるとも知らない土民たちが、薄霧の中に影繪のやうな姿を泛かべて、朝の漁イサどりを始めてゐた。無器用に手網を掬ふ姿であつた。その手網の中から、キラリと鱗を閃めかせて河中に逃げる魚もゐた。

「ふふふ、見ちやゐられねえてば」

平塚は、踵を返して歩き出した。長靴で踏み分けられる雑草の蔭から、わんわん音を立てて蚊が舞ひあがり、所嫌はずに三人の手と顔にとびついた。追つても容易に離れない執拗さであつた。

「うーん、ひどい蚊だ！」

さすがの平塚も高橋も、これには悲鳴をあげなければならなかつた。

「無理もない。ここは噛む刺す蚊だからのう」

清六がにこりともせず洒落をとばした。平塚と高橋は、ポリポリと首筋をひつ掻きながら苦笑した。

「ところで、買魚の方法だが……」

やつとの思ひで天幕小舎に轉げ込むと、平塚は眞顔になつて二人に言つた。

「やつぱし、これに限るてば」

平塚は、左手を口許へ上げて飲む格好をして見せた。

「アルコール政策ですか。わしも賛成です。ききめは昨日の村長で充分に判りました
こんです」

高橋が笑ひながら答へた。

「ビール罎に詰めたアルコールは鮭五十本と交換する。——これが我々漁師仲間の不
文律みてえなもんさ。アルコール一本の原價は金三十錢也、悪くねえ商賣だらう」

清六が、そのときポツリと口を挟んだ。

「おらは反對だこて」

「えッ？」

平塚と高橋は、耳を疑ふやうに、清六のへの字に結ばれた唇を覗めた。

「土人にアルコールを飲ませるのは反對だと言ふんだ」

平塚は、薙の上に膝を進めた。やや氣色ばんだ顔であつた。

「反對だなんて、堤！ 函館でアルコールは積み込ませたのは誰だ、貴様ぢやねえ
か！」

「あん時も賛成ではなかつた。貴様の言ふ漁場の慣習とやらに嫌々ながら従つたまで
だ。おらア最初から、アルコール政策には疑問を抱いとつたのだ」

「疑問？」

「おらア昨日、あのコスイギンの掌を返すやうな態度を見せつけられて、つくづく考

へたこつた。アルコールでもんの、不思議な魔力をのう……」
うつすらと陽の光が天幕にあたりはじめ、清六の血色のいい顔が浮き出して見え
た。

「平塚！ 貴様はこの土民の、あの蒼白いひしやがれたやうな顔を何と見た？ 奴
等にも働く氣もねえこんだ。ごろごろ寝て暮したいんだ。男も女も、大方はアルコー
ル中毒にかかつてるかもしれないねえ」

「ふッふ、だから奴等にやアルコールが一番効目があるんだ！」

「そら判つてるこんだ。それが一番手つ取り早い方法だらう。だがのう、そりやまる
で、毒と知つてて毒を食はずやうなもんぢやなからうか。カムチャダールは東洋人だ
我々と同じ東洋民族だ。おら、奴等がみすみす滅びて行くのを、ちつと見てゐること
がなんねえがだ！」

「ほう、貴様、いつから人道主義者になつた？」

平塚は嘲けるやうに細い眼を光らせ、わざとらしく肩を聳やかした。だがその語尾
は、壓倒された弱々しさに顫えてゐた。高橋は、淺黒い顔をちつと俯向けてゐた。

「後世の歴史家はきつと斯う強辯するこんだろ。——カムチャダールを滅ぼしたのは
日本人だとな。日本人の漁師がカムチャダールを墮落させたんだとな。おら、このま
までは何だか、さう言はれても抗辯できなくなるやうな氣がするがだ……」

「學のある奴にや敵はねえ！」

鼻柱が強いだけに、一つ急所を叩かれると惨めなほど物が言へなくなるのが平塚の
癖であつた。天幕の外には、寶壽丸から朝の食事を運んでくる漁夫たちの賑やかなざ
わめきが聴こえ、漸く漁場らしい雰圍氣が濃くなつてきたといふのに、こんな理窟つ
ぽい問答を交してゐることが、齒痒く思はれてならなかつた。

「せば、一體、どうしろといふんだ！」

相變らず泰然と落着き澄ましてゐる清六に、益々焦立つてくる平塚であつた。」

「まあ、おらさ委せてくれんかの」

「勝手にせばええ！」

平塚は到頭立上つた。漁業上ではズブの素人だとは思ひながらも、人間的に一目も二目も置いてゐる清六に對して、それだけの毒舌を吐くのが精一杯であつた。

「日本の紙幣ぢや、土人は一尾も魚ば買らねえど」

捨臺詞を叩いて外へ出た。冷たく川風が、昂奮した頬をなぶるやうに吹きつけた。長靴の先で小石を蹴つた。運悪く、ぼんやり草原に寝轉んでゐた漁夫が二三人、頭をなしに叱りつけられた。

思へば、最初からあまりにも理想的に結びつけられた二人であつた。同年配で、反對の性格で、今日までいさかひ一つしなかつたのが却つて不思議であつた。

(これが破綻の原因になりはしないか?)

到着早々の出來事だけに、さすがの平塚も後味が悪かつた。資本主は清六でも、直

接仕事の總指揮に當るのは自分である——その矜持を抱いてゐるだけに、今の清六の意見には一步も譲りたくはなかつたのである。

(清六め、あとでゆつり説き伏せてくれやう……)

だが、その意氣込みも空しかつた。

清六の天幕小舎の前に立つて、彼から何かの命令を受けたらしい漁夫の數名が、ばらばらと海岸の方へ馳けて行つた。そこには、昨日の揚荷が、またそのまま、積みつ放しになつてゐた。漁夫たちは、その揚荷の中から繩掛けの石油罐を五つ六つ引つ張り出した。中味は、鑷に詰め更へる前の生のアルコールである。

平塚は眼を瞠つた。止めやうにもあまりに距離があり過ぎた。漁夫たちの肩に擔がれた石油罐が、鈍い朝陽の光りを浴びてキラリと光つたかと思ふと、次の瞬間には、黄色い河口の流れに乗つて、捲くれ返る磯波の中へ突進してゐた。しばらく氷片のやうに漂つてゐたが、すぐ波の底へ消え去つてしまつた。

それは、あまりにも確乎たる信念の現はれではないか。平塚は頭を垂れた。
「清六め、やりやがつたな」

思はず苦笑した。その苦笑は臆て、腹の底からのすがすがしい笑ひに變つて行つた。

三

高橋榮吉が心配するほどのこともなかつた。

何がさうさせたのか——晝飯を食ふ頃には、綺麗に仲直りをしてしまつてゐる清六と平塚であつた。眼角を立てた朝の口論は誰のこととばかり、清六は駄洒落を飛ばすし、平塚は旨さうに巻煙草ペペロースをふかしてゐた。

だが、高橋も呆れてばかりはゐられなかつた。それから間もなく、シャツ一枚で凜々しく身仕度をした彼の姿が、大勢の漁夫たちに混つて、キビキビと動いてゐた。

仲直りをした清六と平塚が、何を相談したのか？ その解答は、漁夫たちの一つの機械になつたやうな働きぶりであつた。

河岸近くの、比較的雑草の少い空地沿ひに、長さ數間に亘つて、二股になつた柱が
一列に突つ立てられた。その上に、太い丸竹が何本も懸け渡されて練木になつた。更に丸太や竹が結びつけられて骨組ができると、屋根代りの厚い藎が、端からくるくるとくり付けられて行つた。まるで競馬場の厩舎を思はせる細長い堀立小屋が、高橋の指揮に依つて、忽ちのうちに急造されたのである。

干鮭ニクラを造る手を休めて、カムチャダールの老幼男女が、怖々と遠慮勝ちに近づいてきた。好奇心が、彼等のうるんだ瞳に珍らしく光を點じてゐた。こんなに忙しげに働く人間どもを、初めて見たと言ひたげな顔つきであつた。

やがて、昨日陸揚げされた得態のしれない藎棚の數々が、この急造小屋の前に運ばれてきた。好奇の瞳を愈々強く輝かすのはカムチャダールばかりではなかつた。平塚

でさへ中味の實際は知らなかつた。ただ、先刻の清六の話に依つて、それは寶壽丸の出帆直前、清六が伯父清吉と新潟中を馳けづり廻つて買ひ集めた「玩具のやうな日用雜貨」であるといふことだけは知つてゐた。

清六は荷物を解かせた。

莫座の上に中味が陳べ立てられた。

カムチャダールの眼は更に輝きを増した。もはや遠慮も怖れもなく、歡聲さへ擧げて小屋に近づいてきた。その數も、いつか數十人に殖えてゐた。鮭獲りを中止して、濡れた手足のまま馳け寄つてくる男たちもゐた。

彼等をそれほどまでに昂奮させたのは、次のやうな品物であつた——

紅や緑のけばけばしいガラス玉。彫刻のある鍍金の指輪。ブリキの匙やフォーク同じくブリキのサーベル。赤い房のついた軍帽の模造品。花模様のメリンスの風呂敷。ズツクの短靴。粉白粉。燐寸。齒ブラシ。歪んだレンズの虫眼鏡。ガラスの籠。紙革

製バンド。造花で飾つた簪、等々——

これらは確かに、アルコールよりは有能な品物だつた。無害であるばかりか、彼等に相應しい「文化」の向上に役立つものに違ひなかつた。

着色したガラス玉は、娘たちの結婚式に缺くことのできない飾り物であつた。鍍金の指輪は、彼等にとつて金塊よりも貴重だつた。ブリキの食器は、銀のそれよりも輕くて便利だつた。サーベルは青年たちの威容をより以上颯爽とさせるであらうし、怪我の心配もなかつた。メリンスの風呂敷は、娘たちの小意氣な冠り物になるし、また蚊よけの役にも立つてあらう。

莫座の上に絢爛と並べられたそれらの品物が、土民たちの購買心を頂點にまで沸騰させた。まさにこの急造小屋は、「堤商會」の出張所——飾ショウイン窓のない百貨店デパートと化したのである。

火を噴くクルチーフスカヤと、廣漠たる凍原フンドラと、グイ松の疎林と、灣のやうなカ

ムチャツカ河と、土民小舎——この原始的な風景とは、あまりに對蹠的な、あまりに人工的なこの百貨店！

勿論、店主格で、莫座製陳列棚の前に、端然と控へてゐるのは清六であつた。ほのかな會心の笑みが、彼の薄髭の生えた口元を掠めた。——おそらく一年前、ただ一人沿海洲へ、ニコライエブスクへの道を辿つて行つたとき、彼の手に提げられてゐた風呂敷包の内容は、いま目の前に並んでゐるやうな「日用雜貨」ではなかつたらうか？

土民たちのざわめきが、突然、しーんと鎮まり返つた。

鳥のやうな怪しい聲が、澄み切つた大氣を衝いて流れてきた。だが、清六も平塚も驚かなかつた。昨日、寶壽丸で聞いた聲と同じ聲である。村長コスイギンが、今日は勿論獨木舟ではなく、一頭の馴鹿に跨つて飄然と上流から現はれた。

今まで出馬の遅れてゐたのは、さすがに昨日のアルコール六本が、彼の強健な心臓をも震撼させたのであらう。蒼黒い眼がどろんと濁つてゐた。しかしその眼も「堤商

會」の葦小屋を覗いた途端、異常な歡喜の色に輝いたのである。

彼は、村民たちを押しつけて最前列へ出た。昨日からの友人——清六と高橋に會釋をした。毛むくじやらな手を莫座の上に伸ばして、ブリキのサーベルを掴みあげた。

——こいつは儼に格好の武器だぞ——さう言ひたげな表情である。

今や、立役者平塚常次郎の登場すべき機會となつた。彼とコスイギンの間、再び不思議な露語問答が開始された。問題は、網の中の魚と、莫座の上の品物との換算率を決定することにある。

ガラス玉十個——鮭五尾。

虫眼鏡一個——鮭四尾。

風呂敷一枚——鮭三尾。

ブリキ匙二本——鱒二尾。

燐寸一個——鱒一尾。等々。

「結局、鮭が四錢、鱈が五厘つてこんになるの。ふーん」

平塚から「換算率」の報告を訊いた清六は、品物の仕入値段で魚の原價を算出した。それは決してアルコールの場合に較べても「悪い値段」ではなかつた。

コスイギン立會の下に、取引は即刻開始された。

獲りたての鮭鱈が、獨木舟にぎつしり満載されて、百貨店のある下流まで漕ぎ寄せられた。そこではもう、漁夫たちが鹽味の口を切つて待ち構へてゐた。魚が岸へ抛り上げられると、片つ端から鹽切りにされた。スコップが光り、眞白い鹽が噴水のやうに飛び散り、鱈や鮭は、殆どまだ生きてゐるまま、井桁なりの櫓型に積み重ねられて行つた。

鮮度の鑑定係は平塚だつた。すこしでも腹が切れてゐたり、昨日の獲り残りが混つてゐたりすると、

「馬ッ鹿野郎、こらッ！」

齒切れのいい一喝と共に、容赦なく傍の草原へ抛り出された。

受渡係兼數取り役が高橋だつた。鹽切り尾數が嚴重に手帳へ書き込まれて、獨木舟一隻の區切りがつく度に、

「鮭六十三、鱈二十八！」

といふ風に、店主の清六に報告された。

混雜を妨ぐために、品物の撰定權は店主に委されてゐた。清六は、鮭鱈の尾數に應じて、一掴みのガラス玉を、數枚の風呂敷を、一包みの燐寸を、コスイギンの手に渡した。

土民たちは、鱈だらけの手でそれらの品物をコスイギンから受け取ると、歳暮大賣出しの福引に米俵をひき當てた少年よりもつと嬉しさうに顔を綻ばせて、いそいそと彼等の小舎へひきあげて行くのだつた。

「こいつは、普通の相場で扱はれては困る」

さう言ひたげな顔つきで、一隻の獨木舟から、大きな魚が抛りあげられた。

「なんだこれ！ 鮭の化物かいな？」

高橋は眼を圓くした。そいつは體長だけでも鮭の三倍、鱒の五倍は確かにあつた。

「これは鱒の助といつてな、あちら名をキング・サーモン、鮭鱒族で一番でかひ奴だ」

平塚は、即座に斷定を下した。勿論、品物との換算率も、鮭の三倍と評價された。

一と口に鮭鱒といつても、かなり多數の種類があることを、清六も高橋も、はじめに現實に知つたのであつた。大ききの順に並べると――

鱒の助。ケタ鮭。紅鮭。銀鮭。白鮭。シヨマ鮭。そして最小が鱒であつた。――最

大の鱒の助では、體長六尺、重量八貫乃至十二貫に達するものがあつた。

鱒鮭族の品評會の如く、カムチャツカ河は前述の總ての種類を網羅してゐた。それは、専門家平塚の眼を眩らせるほどであつた。だが、惜しいことに、今は數が尠かつ

た。

十隻たらずの獨木舟が空になると、もう新手はなくなつた。午後六時過ぎてゐたが北緯五十六度のウス・カム村はまだ明るかつた。遙か上流では、ツツミ・デバートの品物に勇猛心を奮ひ起した土民たちが再び河中へ漕ぎ出して、人の變つたやうな熱心さで手網を掬つてゐたが、もはや眼を射るやうな銀鱗の閃めきは見られなかつた。

「既に終りを告げたり……」

コスイギンは、嚙煙草をくしやくしや噛みながら平塚に向つてさう言ひ、例の、露西亞官吏に教はつたやうな、肩を竦め兩掌をひろげる西洋臭い身振をしてみせた。

「當地の漁期は、四月より始まり、五月中旬までを第一期、六月中旬までを第二期と稱す。それ以後の第三期、即ち現在に於ては殆ど希望をつなぐことを得ず」

コスイギンは、彼の蘊蓄をかたむけてそれだけのことを言ふと、馴鹿に跨つて百貨店に別れを告げた。ブリキのサーベルが、彼の腰にかしやかしやと鳴り、愛妻に贈る

のであらう、花簪の一と束が胸のポケットを飾つてゐた。

今が第三期であることは、平塚も知つてゐた。漁期が遅れる——と、寶壽丸の船脚をもどかしがつたのもそのためであつた。だが、優良漁場のこのウス・カムでは、年によつて第三期でも相當の漁獲があることは、記録の上にも残されてゐたし、福本萬作の語るところでもあつた。

カムチャツカ河は、平塚の期待に冷酷な回答を與へるやうに、薄黄色い濁流の音を底深く聽かせてゐた。

「この水の色では、鮭もよう廻らんかもしんねえのう」

清六は、半日、「陳列棚」の前に立ち通したふくら脛の疲れを揉みながら、よそ事のやうな冷靜な聲でさう呟いた。郷里三條の市日いちひのやうに賑はつた葦小屋の前には、もう人影一つなく、鹽切された鮭の山が白々と眼に映つた。それは、鮭五萬尾を積むことのできる寶壽丸の船艙と較べて、あまりにか細い、飯粒ほどの量であつた。

四

「噛む刺す」蚊の群は、思ひがけない御馳走——日本人の血をたら腹吸つて、存分に肥えふとり、同族を蕃殖させた。

北洋は夏のさかりである。

あまりにも苛酷な試練にうちひしがれた生きとし生けるものは、この短かい夏の間、全精力をあげて太陽の恵みを吸ひ取らうときそひ立つのである。

クルチーフスカヤは、めつきりと紫色の麗容を加へてきた。連山の雪はすべて溶け落ち、濃い山裳が、鑿で彫りあげたやうであつた。

今まで空漠とした平原に見えてゐた地層は、色を塗つたやうに青づんできた。伸びはじめた苔類をしとねとして、金鳳花、櫻草、葦、つるこけ桃などの原色の花々が、錦をちりばめたやうに咲き亂れた。毒婦の衣裳を思はず黒百合や、さつきの強烈な色

彩が點綴する。芳香は誘はれた虻の群が、蜜を集めるのに忙しい。蠅までが、干鮭の棚からお花畑へ移動してくる。

空は、白つぼく輝いてゐた。

海は、ブランクトンの缺乏を物語るやうに瘦せこけた色をしてゐた。

手網を掬ふ土民たちの姿が河の中から見えなくなり、もう幾日か経つてゐた。

ツツミ・デバートも、開店休業のかたちだつた。

河岸から眺めると、伸び切つた雑草に半分がた船腹をかくされた寶壽丸が、漂着船のやうにしよんぼりと見えた。守護神も、だらりと鼻を水面に垂れてゐた。

鹽切りの濟んだ鮭や鱈を、傳馬船で寶壽丸の船艙へ搬ぶといふ僅かな仕事が濟むとあとは何もなかつた。天幕小屋の漁夫たちも、船に残つた船員たちも、今はぼんやりと睡る工風をするより外に仕様がなかつた。

總帆逆帆——吼え狂ふ逆風と闘ひながら、凄い低氣壓を乗り越へてきた、あの生死

の間の航海中のことが、却つて懐しく想ひ出されるのである。

「やつぱし、人間は稼ぐやうに出來てるもんだ」

「カムチャッカまで、保養に來たわけか」

漁夫たちは、悟り切つたやうな顔でそんなことを言ひ、またうとうとと臉を合せるのだつた。これでもか、これでもかと倦怠を押しつけるやうに、北洋の夏の日は内地の二倍かたも長かつた。

だが——このやうな弛緩した時期に於ても、信念と希望をもつ人間は、それを持たぬ人間とは、體の動かし方が違ふのである。

清六も平塚も、欠伸を罪惡と心得てゐるやうな人間であつた。二人は、高橋と増野船長を誘つて、毎日傳馬船に乗つて漕ぎ廻つた。カムチャッカ河を遡航したり、沿岸傳ひに遠くの名の知れぬ岬へ渡つたりした。自然の觀察と、民族の研究がその目的であつた。單なる船遊びではなかつた。

干鮭クラッの製法と、その貯藏方法。カムチャダール以外に、どんな民族が棲んでゐるか。そしてまた、どのやうな動物が如何にして捕獲され、その皮は幾何の富を露西亞本國へもたらすか、を調べた。土民の食物は、魚肉と馴鹿トナカイの肉が主なるものであるが、凍原ツンドラに多いフレップの實やコヂャクの葉をそれに混食して、無意識的に壞血病の豫防を果してゐることもわかつた。カムチャツカ河はどのやうな性格の河であるか――淺瀬と深み、水質、水量などもわかつてきた。

(今は、上流からの冷たい雪解け水がまだ川を濁してゐるのだ。そのうちきつと澄み返るときがくる)

鮭の來游に對して、さうした一縷の希望をつなぐこともできた。

晝間の直剣な行動にくらべて、夜になると、彼等は衣裳をつけた俳優のやうに變るのだつた。清六も平塚も、舟夫船員たちも、多くは三十前の若さである。彼等の青春の血潮は、夕食の箸を置くと同時にその口を見出さうとするのだつた。

長い冬、何の娛樂もなく屏息されてゐるカムチャダールは、夏だけは毎夜お祭りのやうに騒ぐのだつた。何よりの楽しみはダンスだつた。陽氣な、そして哀調を帯びたバラエイカの樂の音が聴え出すと、寶壽丸の人々は故郷の盆踊りを想ひ出した。天幕からうかれ出して、いつのまにか踊りの輪に加はるのだつた。

コスイギンが、これも露西亞仕込みらしいコサツク・ダンスを、長靴の尖をピンピン刎ねながら踊つた。

買ひたての花簪を髪に飾り、ガラス玉を裳にちやらちやらと鳴しながら、どれもこれも村一番に見える娘たちが踊り出すと、勇敢に、衆人環視のなかへとび出して、その一人に申込みをしたのは平塚だつた。獨身者の權利とばかり手を携へて、怪しげな社交ダンスを踊るのであつた。

高橋がお國ものの三階節を歌ひ、増野船長が「權兵エ種蒔き」を踊り、漁夫全員の沖揚音頭の大合唱が終幕フィナーレであつた。露西亞式の粉茶が出る。フレップ料理が、チョコ

レイトが出る。コスイギン秘藏のラム酒が、ほんのちよつぶりながら幹部たちの杯につがれる。談笑の聲が、星の多い夜空にひびく。潮風を吸つた焚火の炎が、あかあかとこの團欒をてらし出す――

だが、かうした生活も、カムチャダールのやうな根ツからの遊び好きではない日本人にとつて、がやて堪えられないときがくるのだ。

懐郷病といふ憂鬱な症状が、しだいに漁夫たちの間に瀰漫しかけた。そして増野船長と平塚との間に、

(即刻切揚げか？ それともまだ少し漁期を待つか？)

といふ問題が、真剣にとりあげられた。

だが、天運は、これらの勇敢な先驅者・日本人を見捨てなかつた。彼等の努力が、遂に酬ひられる日がきたのである。

明治四十年八月十五日。

堤清六の一生を左右する――そして日本漁業の運命を決定した歴史的なその朝は、一人の漁夫の瘠高い聲に明けたのである。

「おい！ 見れ、見れ！ 河の水が銀色になつたでや！」

清六は、がばツと毛布を刎ね上げて天幕をとび出した。

五

第三期の群來！

學者が腦漿をしぼつて、未だに解決のつかぬ鮭鱈族の不可思議な動き。人間の眼の夢にも届かぬ遙かな深海に、彼等はどのやうな營みをつづけてゐるのであらうか。人々は、彼等が陸岸に近づくととき――攝氏十度の適水温を追つて産卵のため河川を遡るとき、はじめて彼等の姿を見ることができるところ。

第一期、第二期の群來を経て、更に無盡藏な第三期の群來！ それは夥しい大群で

あつた。一尾々々が、精子を卵をぎつしりと腹に貯へて、生殖の本能にのたうち廻つてゐた。遙か上流の水清らかな川底に、一刻も早く卵を産みつけ、精子をふりかけねばならぬ。彼等は雄も雌も、頭を突き立て鱗を顫はせて、雲霞のやうにウス・カムの岸に押し寄せたのである。

この二三日、めつきり雪解けの濁りのとれたカムチャツカ河は、豊かな酸素を含んで静かに流れてゐた。海へ放出する清水が清の群を誘導した。渚に打ち返す磯波がべつたりと凧いだかと思ふと、それに代る銀色の波がひたひたと河口に迫つた。流れてゐるかゝる判らないカムチャツカ河が、俄かに、川底からそわそわと顫え出し、そして見る間に逆流しはじめた。

コスイギンは、今朝も怪鳥のやうな聲を立てねばならなかつた。

踊り疲れの睡たさが一べんに吹つとんで、カムチャダールの男どもは、舟！ 魚！ と叫び立てながら河岸へむらがり出た。

強い電流のやうに川底へ傳はつてきたものは、やがて水心に、水上に、遂には空中にまで盛りあがつてきた。冷たい風さへ、魚の流れに沿ふやうに吹き出した。魚、魚、魚、魚——無数の刃物のやうな閃めきが、走り、流れ、泳ぎ、打ち重なり、飛躍し、猛り、狂ひ立つた。

寝呆けの醒めぬ低い朝空が、ぼんやりと、この素晴らしい景觀の上に垂れ下つてゐた。

もはや土民も舟を河中に漕ぎ出すことは困難であつた。また、その必要もなかつた。土民たちは、顔と半身をしぶきに濡らしながら、手網を岸へ突き出せばそれでよかつた。草の上へ刎ね上つた鮭へ、のそのそと這ひ寄つて行き、それを手掴みにすればよかつた。

「網だ！」

この命令が、低く、搾り出すやうに清六の唇から洩れたのは、この時であつた。

血走つた眼で、平塚が、深く頷いた。

萬一の場合を豫測して、秘かに寶壽丸の船底に積み込んできた一寸目二十反の漁網が役立つときがきた。それは、綿糸よりも頑丈な越後麻で手固く造られ、柿澁の匂ひをぶーんと漁夫たちの鼻腔にしみ込ませた。

網は傳馬船に積み込まれた。傳馬船は、土民の漁船よりも小型だったが、それが日本人の漁夫の手に操られると、遙かに重厚な感じがした。撰り扱きの數名の漁夫と、平塚がそれに乗り込んだ。

コスイギンが、危い！ と眼を瞠つたときにはもう、傳馬船は易々と河心へ乗り出してゐた。同時に、網が、黒い尾を曳いて投入されてゐた。櫂は、漕ぐといふよりも轉覆をふせぐためのみに役立つてゐるやうに見えた。

「もつと右！ そこは淺瀬だぞ！」

清六は、傳馬船の方へ、半身を乗り出して叫んだ。數日前の河床の調査が、いま有

効に役立つてゐるのであつた。

河岸から河心に向つて、十數間に張り出された網は、鮭の群をその一線に堰き止めたまま、急角度に弧を描いて岸へ曳き戻されてきた。それは、盛り上る鮭の群と、人間との必死の力競べだつた。

「頑張れ！」

清六が叫んだ。高橋が叫んだ。ウラソフまでが叫んだ。カムチャダールも聲援を送つた。

傳馬船の漁夫は齒を喰ひしばつた。ある者は網棚を掴み、ある者は櫂を握りしめた平塚は、旅順の戦場で大砲を撃ちまくつた平塚軍曹にかへつてゐた。鮭は網にあふれ無数の鱗が躍り狂ひ、しぶきが奔騰し、漁夫たちの全身をすぶ濡れにした。

網が岸へ曳き揚げられるのを待つてゐたやうに、鮭は、先を争ふやうに岸へ刎ねあがつた。見事な拋物線を描いて、どさりと卓へ落ちるものさへあつた。手網で、スコ

ツブで、漁夫たちは鮭を陸へ掬ひあげた。もどかしくなつて、手掴みにする者も
た。

鹽吠が開かれ、直ちに鹽切りが初まつた。

傳馬船の別の一隻は、河口の、寶壽丸の舷側近くに網を張つて、岬を迂回し、壁の
やうに突入してくる魚鮮と闘つてゐた。

炊出しが寶壽丸から運ばれた。漁夫たちは鱗だらけの手で鷲掴みに食ひ食つた。

みな眼を釣りあげ、憑かれたやうに動きつづけた。時間の概念もなく、疲労もなか
つた。

一と網、また一と網！

獲られれば獲られるほど、新手を増して、魚はひたむきに逆襲してくる。

網は數ヶ所を破られ、傳馬船は浸水しはじめた。だが鮭の群は、次の日も、また次
の日も、海からしばり出されるやうにカムチャツカ河へ押し寄せてきたのである。

堆高く積まれた鹽切りの山が、漁撈の間隙を狙つて憐ただしく寶壽丸へ運ばれて行
つた。一時、赤い船腹を見せてゐた寶壽丸は、再びすつしりと重々しい吃水を沈めは
じめた。

ツツミ・デバードの全商品は、この夥しい「買魚」の代償として、洗ひざらひ土民
たちに提供された。それはお話にならぬほど安い代償だつた。土民たちも今では、鮭
一尾を、蠅一匹ほどにも思はなくなつてゐた――

この豊漁の嵐に結末符ヒリヤドを打つやうに、三日目の朝、冷たい雨がウス・カムの村を襲
つた。

それはまた、秋から一足飛びに冬の來る、佗しい季節の前哨でもあらうか。

絢爛の夏は、南の空へ消えかけてゐる。クルチーフスカヤの麓は、再び、蕭條た
るその本來の姿を雨の中にとり戻した。

雨が霽れると、清六と平塚は待ち構へてゐたやうに歸國の仕度をはじめた。

寶壽丸の船艙を埋めた五萬尾の鮭鱈は、事業初年度の成績として決して悪いものではなかつた。だが、帳面はまだ閉ぢられてはゐない。満足すべき成果を見るためには——首肯できる相場でこの五萬尾を貨幣化するためには、一刻も早く寶壽丸の錨を捲かなければならない。

出帆の日がきた。

凡そ一ヶ月の間、共に働き共に遊び、共に踊つた愉しい追憶を惜しむやうに、カムチャダールの全員は一帳羅に着飾つて海岸へ出た。

(東方の友よさらば！)

音高い投げキッスが、娘たちのフレップのやうに紅い唇から、平塚の精悍な緒顔へ送られた。

尊敬するツツミ・デバートの店主の手を、コスイギンの手は固く握つた。そしてその手にまたも握を握つて、寶壽丸の曳く長い水尾の上に獨木舟カヌーをうかべた。鍍金の動

章をつけブリキのサーベルを提げた威容も忘れて、彼は、あかい露の下を何べんも指でこすつた。

中天に直立するクルチューフスカヤの火煙が、少しづつ動き出した。

清六は手摺につかまり、長い帯のやうなカムチャツカ河を見下しながら、傍の平塚に吹きかけた。

「えらい鮭だつたのう。おらたちの獲つた鮭は、あのうちの何十萬分の一、いや何百萬分の一に當るこんだらうのう……」

平塚は微笑しながら、コスイギンの身振りを真似て、両手を擴げ肩先を竦めた。

「解らん！」

「無限だのう……」

無限——この二字こそ、カムチャツカ河を埋めた鮭の鱗の壯觀とともに、彼の頭腦に生涯消えることのない美しい夢を彫りつけたのであつた。

守護神——天狗の面は南を睨んでゐた。」

胎 動 期

「父様は何所へ行かしやつた？」

知人から隣人から、さう訊かれる度に、七歳になつた長男の商司は指を北に向けて

「カムサツカだこんで」

と無心に答へるのだつた。

糸子は、それがいちらしくてならなかつた。

カムチャツカといへば、郷里の人々は、地球の涯の獣も棲まぬ氷の海と思つてゐるのであつたが。糸子もまた、ふと、それが眞實のやうな錯覺に捉はれるのであつた。

どうしても、あのやうな無鐵砲な精神がひそんでゐさうもない、物優しい、大きな聲一つ出さない夫清六。

(無事な姿が、見られるこんだか……?)

針仕事するとき、炊事するとき、店の客との應待のとき、ふツと通り魔のやうに胸を掠める不吉な豫感があつた。

氣丈な魂でしつかりと不安を抑へて、それを形には出さなかつた。喜怒哀樂を姿に見せぬのは、雪國人の特性であり、彼女もまたそれであつた。同じやうに案じてゐる舅や姑の前で、彼女はまるで、いま夫に會つてきたやうな氣安さで、二人の老人を慰めるのであつた。だが、心はいつも空虚だつた。安眠できぬ夜がつづいた。

「昨夜の、兄にやさの夢を見たべの」

義妹のヨシが、起き抜けの挨拶にさう言ふことが稀ではなかつた。

「ほう。おらも見だが」

彼女は軽く受けて、すぐ悪戯つばい顔になり、ひやかすのだった。

「ほッほ、ヨシさは平塚さんの夢だこんだろ」

眞赤になつた義妹の首筋から、彼女は娘時代の甘い夢を想ひ出すのだった。寒中の五十嵐川で、水桶を擔いでゐた清六の姿が、いちばん印象ぶかく臉に通ふのだった。

その清六から、今までに來た便りといへば、たつた一本、函館からの、寶壽丸出帆を知らせる電報だけだった。

郵便局のないカムチャツカから、ハガキ一本來る筈はないと諦めてはゐながらも、淋しかった。便りを待つ氣持で一杯だった。

しかし遂に、その便りが來た！

十月も半ばとなり、刈穂を積んだ牛車の轍が、がたことと五十嵐川の土手を通ひだす頃であつた。やはり、今度も函館からの無愛想な片假名ばかりの電報であつたが、夫を乗せた船が、いま函館から新潟へ近づきつつあることがそれでわかつた。

十月二十日——それが、電報に記された、新潟到着豫定日だった。

もう幾日もなかつた。眼の前が戸を開けたやうに明るくなり、飛び立ちたいやうな喜びだった。それをちつと抑へてゐると、思ひがけなく鼻の吉平が、

「新潟へ行つて見よかの」

と言ひ出したのであつた。

恰度、清吉伯父からも勧めがあつた。出不精な母親のチヨは、清六の弟・妹たちと留守をまもることになり、草鞋を穿いたのは吉平と、商司の手をひいた糸子と、ヨシだった。

「商司はヨシさのめんこだこんで、ヨシさにも行つて貰ひます」

糸子は、姑にさう挨拶した。事實、商司は、禮儀きびしい母親よりも、氣樂なヨシと寝ることが多い位だったが、それが新潟行の本當の理由になるかどうかは疑問だった。

桃割に結つた小柄な彼女は、もぎたての林檎のやうに初々しかった。新潟通ひの荷足船は、彼女の姿を秋晴れの信濃川にしたたらしめた。

凡そ一年前、同じ信濃川は、懊惱の身を荷足船に横たへた夫清六を新潟へ運んで行つたのだ——糸子は、それを想はずにはゐられなかつた。信濃川の水が、カムチャツカにまで通じてゐることを、いまはつきりと思ひ知つたのであつた。

日和山の頂きと、その蔭の砂丘になごましい陽ざしが伸びて、新潟は静かな秋にひたつてゐた。黄色くなつた柳の葉が、運河の水に吸はれて流れた。辻々には、寺泊あたりからの漁師の妻が、ひなびた呼び聲で季節の魚をふれるのが聴へた。

伯父清吉の店——「堤商會」の二階にあがると、ほんの僅かだが、信濃川口の突き出た砂洲と、日本海が望まれた。海は青い繪具をとかしたやうに見える日もあり、灰色の布をひきのばしたやうに見える日もあつた。

ヨシの心は、それと同じに照り、曇つた。

「平塚さんは乗つて來なさることつたかの？」

いまは、心に匿すこともできず、嫂の前へその不安をぶちまけるやうになつた。その度に糸子は、

「來なさるとも！ なんて來んことが……」

と、窘めるやうに答へるのだつたが、自分ながら語尾の弱さが氣になつた。平塚の實家は函館なのだ。寄港した寶壽丸から、彼はきつと下船したに違ひない。今頃は長い出稼ぎの疲れをわが家の疊の上に憩めてゐるに違ひない——

清吉老と吉平老は、毎日のやうに出歩いてゐた。仲買商人のやうないでたちの人が時々店先へ訪れて口早に何かしゃべつてゐた。

柱曆に二十日といふ日が出て、胸躍らせたのも空しかった。信濃川の突堤へ、商司の手をひいて出かけて行つた糸子は、夕風の寒さに顫えながら東驛前通りへ歸つてきた。

次の日も彼女は朝早くから波止場に立つた。話に聴いただけで寶壽丸の姿はまだ見たことはなかつたが、港をうづめるどの船もみな、彼女には寶壽丸のやうに見えた。子供の眼にはまだ珍しい蒸気船の吐く黒煙に、商司は手を振つて喜ぶのだった。

「時化にでもぶつかつたこんだろ……」

二人の老人は、夕食の箸を重たげにとりあげながら、どちらからともなく呟くのだった。

月が變るまであと數日といふ朝のことであつた。寢不足の腫れつばい臉で、二階の窓をひきあけたとき、彼女の顔が礫を受けたやうにこわばつた。

「ヨシさ、船が！」

おめざの龜田梨を噛つてゐた商司も、枕を刎ねて窓邊へとんできた。

遠く震んだ海の上に、ぼつんと黒い船影がうかんでゐた。ヨシの眼には、それが出船か入船かもわからなかつた。

「寶壽丸さ。あれが寶壽丸さ！」

ヨシは呆氣にとられたやうに、嫂の眞剣な横顔を眺めるのだった。

やはりそれが寶壽丸だった。

回漕店から報せがきた頃には、糸子はもうキリリと髪をすき直して、身支度を整へてゐた。商司にもよそ行きの久留米紺を着せてゐた。

寶壽丸は、川口の燈臺の根方を大きく廻つて、川波のなかへ滑り込んできた。朝日を受けて天狗の面が眞赤に輝いてゐた。長い航海と、その途中の幾多の波風を思はせるやうに、百六十三噸の船體には矢鱈な擦り傷がついてゐた。塗料が剝げ落ちて、黒い木肌をさらしてゐるところもあつた。甲板には、殆ど全部と思はれる漁夫や乗組員が現はれてゐた。

——カムチャツカから直航の船！

——鮭を五萬尾積んできた！

その噂は、もう波止場中に知れ渡つてゐた。寶壽丸の平凡な寡れた姿は、その頃珍らしい外國船の豪壯な姿よりも人々の眼を惹いた。

清吉老と親交のある、大問屋の益齋藤喜十郎が、取巻きの海産商連中をひきつれて河岸の突堤に頑張つてゐた。寶壽丸は帆を卸して、情力で突堤へ近づいてきた。

「お父だ！」

商司が叫んだ。少年の優れた視力が、真先に清六の姿を見出したのだ。思つたほど陽に焦けてもゐず、はにかんだやうな微笑をうかべて、清六の和やかな眼が、父吉平の上へ、伯父清吉の上へそがれた。

ヨシは胸が躍つた。息苦しく、何か必死に禱りたい氣持だつた。

清六と肩を並べて、一きは目立つ真黒な顔に、真白な齒を見せて笑つてゐるのが平塚常次郎であつた。

二

「商司。大きくなつたら、汝もカムチャッカさ行くか？」

「うん。カムサッカにや、魚がいつべえことゐるがだか？」

「ゐるともよ、ゐるともよ……」

倅の小さな手に背中を流させながら、清六はうとうと睡たくなつてきた。据風呂の木の香りがしみじみと懐しかった。

湯槽では平塚が、いい氣持さうに下手な義太夫を呻つてゐる。ひつそりとした午下りの、伯父の家の湯殿である。

半歳の勞苦が、揉みほぐされて行くやうな、のうのうとした快よさであつたが、清六の胸の中には、溶け切れぬおりのやうに滯つてゐるものがあつた。

昨夜——「鍋茶屋」での情景が眼先にうかぶ。

新潟一流の名に相應しく、嫌味なく、數奇を凝らした廣間に集つたのは、荷主方の清六、清吉老、平塚の三名に對して、大問屋の金齋藤を初めとする海産商の面々であつた。

用件は、いふまでもなく寶壽丸五萬尾の魚の賣買取引であつた。

俗に四十物師あいらしと呼ばれる海産商は、生き物を扱ふせいにか、同じ商人の中でも特別に抜け目のない鋭敏さの持主であつた。悪くいへばこすつからい程、彼等の眼と口はよく動いた。生來の下戸とはいひながら、勧め上手に勧める酒をチビリとも飲まず、古びたネルのシャツを襟元に見せて、眞四角に坐つてゐる清六の姿は、彼等と對照的な鈍重さであつた。

古着屋が魚屋に鞍更へした新參者。

彼等の眼には、清六がさう映つた。

魚の檢分も、値段の取りきめも、一切清吉老と平塚に委せて、自分はそのまゝ上陸

してしまつた清六。一錢二錢の値段の差に血眼になる荷主ばかり見てゐる海産商たちにとつて、清六のその姿は、世間知らずか、無能者に思はれたに相違なかつた。

ただ、雷親爺の清吉老と、剃刀のやうな感じのする平塚の存在だけは煙たかつた。それで彼等も、寶壽丸の魚は慎重に檢分したつもりであつた。

「まことに立派な鮭でござえますが……」

金齋藤は、禮儀正しく半身を屈めて、正面の三人のうちの誰へともなく切り出すのだつた。

「惜しいことに、鮮度が少し落ちてをりますやうで……」

「鮮度？　生きが悪いといふことがだか？」

清吉老は、性急さうに唇を突き出した。

「ピンピン生きてる奴ば鹽切りにして來たんですぞ」

平塚が、カムチャダールを叱りつけるやうな聲を出した。だが、さすがに大問屋の

齊藤は、穏やかな微笑のまま逆襲してくるのだつた。

「長航海でだいぶ揺すぶられましたら。腹切れや、頭取れが勘からずごせえますやうだが……」

「そりやカムチャツカは遠いですからなア。信濃川で鮭ば獲るのとは違ひます。しかし、寶壽丸は脚の早い船です、航海は最短日數で濟んだ筈です！」

二十日の入港豫定が五日も遅れたほど、日本海で猛烈な時化を喰つたことは、噁にも出さなかつた。久し振りの日本酒の味に、程よく酔ひの廻つた平塚は、その鋭い眼でぢろりと海産商の面々を見廻して、付け加へた。

「魚の詮議よりも、早く値段の詮議はしたらどうです！」

齊藤は依然微笑だつた。盃を置き、商人たちを振り返ると、靜かに正面に向つて言つた。

「濱渡し、三十三文にお願いしたうごせえます」

三十三文——それは一圓につき三貫三百匁の略稱である。そしてそれは、その頃の北海道ものや新潟ものに對する相場と大差のない數字であつた。莫大な航海費や人件費、測り知れない努力——それらが平塚の頭を掠めた。半歳に亘る勞苦の結晶を、たつた一夜の茶屋酒の席上で、座興のやうに決定してしまふこの商人たちが、腹立たしくてならなかつた。

清吉老の土地者らしい交渉に依つて、三十五文まで歩み寄ることができたがそれは結局、一尾平均十錢足らずの値段になるのであつた。如何にカムチャダール相手に、只のやうな代償で積み込んで來た魚とはいへ、それでは收支計算が漸く一ばい一ばいといふ所であつた。勿論、寶壽丸の購入費は別扱ひにしての上であつた。

手打ちが行はれた。平塚は、悲痛な顔でシャンシャンと手を締めた。

改めて、綺麗どころを加へての酒盛りとなつたとき、それまで木偶のやうに押し黙つてゐた清六が、一言、ぼつりと齊藤に訊いた。

「金の親方、あの魚は本當に鮮度が悪いんでがせうか。私はどうも、さうは思へんのですがの……」

その質問の眞意を探るやうに、ちつと清六を瞷めてゐた齋藤は、やがて低く答へた。

「實はの、堤ろん。お主の魚には惜しいことに、紅鮭が半分も混つてゐるがです」

「紅鮭が？ 紅鮭が混ると値が廉い？」

「銀鮭なれば結構です。紅鮭は、關西でも東京でも喜ばれませんこんだ」

齋藤は、論議の餘地がないやうにさう言ひ切つた。

——紅鮭が混ると値が廉い

——紅鮭は無價値だ。

大きな疑問符が、清六の頭に刻み込まれた。その夜の唯一の「收獲」は、この疑問だつた。宴果てて、古町から東驛前通への靜かな夜道を辿りながらも、清六は、紅鮭

紅鮭、紅鮭と口中に繰り返してゐた。そして今、この伯父の家の湯殿に寛ぎながらも清六の眼前には、あの比較的小柄な、圓錐形の、背に横縞のやうな斑紋のある紅鮭がピチピチと尾鰭を躍らせて泳いでゐるのであつた。

平塚の「三勝半七酒屋の段」が一區切りつくのを待つてゐたやうに、清六は聲をかけた。

「おい平塚、紅鮭はどんげにしても内地には向かんこんだろかの？」

平塚は、またかといふ風に、わざと清六の方は見ず、湯槽からあがると、體ぢうにシャボンを塗りつけはじめた。疑問となると、まるで馬車馬のやうにひたむきになる相手の熱心さに、淡白な彼は聊か閉口してゐるのであつた。

「全然向かんこともあるまいが、要するに今までの製法が悪いんだべな。露西亞人は寧ろ銀鮭なんかより喜んで食ふかなア……」

そして、ふと思ひ出したやうに、

「さうさう。俺は去年浦鹽で紅鮭の罐詰つてものを食はされたが、こいつは美味かつたど。新巻鮭あらまらの焼き立てよりも美味かつたど」

「罐詰？」

瞬間、電光のやうに清六の臉に閃めいたものがあつた。

あの繪葉書のやうなベトロバブrosクの街。

沼田商店の薄暗い店先で、虹のやうな氣焔を擧げてゐた郡司成忠大尉の角張つた顔をして、辭し去る清六の耳元へ、謎のやうに囁いた、「これからは罐詰の時代ぢや」といふあの一言。

(罐詰、罐詰……)

厚い壁のやうな雲を破つて、一筋の光明が清六の胸にさし込んできた。その光明が一つの確固たる目標をめざして進んで行くのを感じながらも、彼の無心の佛像のやうな温顔には、聊かの表情の變化も見られなかつた。櫻色にはてつた小肥りの肌を湯に

ひたしながら、平塚に對抗するやうに、下手な浪花節ナニガキを呻りはじめてゐる――

「堤。紅鮭について、研究はしたかつたら、一つ東京さ出かけたらどうだべかな？」

水産講習所さでも行けば、きつといい智慧が借りられると思ふどもなア」

「うん。水産講習所か。……あすこにや伊谷とかいふ偉い先生がゐなさるさうだが」

清六は、別段乘氣でもなささうに、半ば獨り言のやうにさう呟くのだつた。

妻の糸子に催促されるやうな長風呂が漸く終つて、さつぱりした丹前に着替へながら、清六はふと、さり氣ない調子で平塚に訊くのだつた。

「貴様、さう急がんだらう？」

「何が？」

「函館へ歸ることさ」

「うん。……魚の受渡しが済めば寶壽丸は増野船長に委すし、道具類の保管はこの清吉老キヨキウに頼むし、あとは漁夫連中イサヒノリさ賣上金の分配ばせばええだけだから、まづもう半

月で歸れるかな？」

「濟まんかつたの。貴様を故里の函館さ上陸もさせんで……」

「水臭いてば」

清六は、そこですすが言ひ辛さうに口籠りながら、

「貴様ももう二十七だもな。そろそろ身を固めんければ……」

「ほう、こりやとんだお説教になつたな。はッはは」

しかし清六は、ますます眞顔になりながら聲を勵ますやうに言った。

「平塚。おらの妹を……ヨシの奴を貰ふてくれんかの？」

その瞬間、平塚の引き緊つた顔が、窓外の植込にある柿の實のやうに赭くなつたのを清六は、はつきり二つの眼で見たのであつた。

三

その年——明治四十年も、戦捷景氣のうちに暮れかかつて行つた。

新興日本の首都の上に、こればかりは昔と變らぬ名物の空ッ風が、昨日も今日も吹きすすんでゐた。

双子唐棧の着物に角帯を締め、青い唐草の風呂敷を横抱きにした、一見、田舎商人とわかる若い男が、新橋驛の雑沓のなかに降り立つた。まともに吹きつける砂塵混りの烈風に辟易して、彼は一とき、くの字なりに佇んでゐたが、やがて大股に、どつしりした足どりで、赤煉瓦の銀座の方へ歩き出した。それが、堤清六であつた。

二十の頃、父吉平に伴ねられて來たことがあり、これが二度目の上京であつたが、八年前とはあまりにも變つた街の開化ぶりに、彼は一瞬きよろきよろと眼を瞠つた。しかし、いつもの彼なら、薨を並べた商店の一軒々々の前に立つて、飾窓に陳べられた商品の一つ一つに、研究好きな眼を走らせる筈であるのに、今日の彼は、まるで空ッ風に刃向ふやうな勢ひで、まっすぐ敷石を踏み鳴らして急いで行くのであつた。

深川越中島の水産講習所。

彼には、この年初めて開かれた上野の山の「文展」にも、本邦最初の鐵筋コンクリート建築と宣傳された新築「三越」呉服店にも關心はなかつた。ただ目指すのは水産講習所——それだけであつた。

清六にとつて、今は一生の轉換期であつた。

彼が凡人の域にとどまるか、それとも非凡の頭角を抜け出すか——その境目であつた。

いや、彼が既に救はれない凡人ならば、新潟鍋茶屋の廣間で聞いた齋藤喜十郎の言葉を何の疑問もなしに受け入れてゐたに違ひない。そんなら來年からは紅鮭は獲らずに、銀鮭だけを後生大事に獲りませうと答へ、昔からありきたりの「鹽引鮭」の製法を従順に墨守して、平凡な、「近清ちかひらの兄にやま」といくらも開きのない出稼ぎ漁師の道を進つたに違ひない。また、平塚常次郎から聞いた紅鮭罐詰の話からも、何の暗示

もいくらの示唆も感じ取れなかつたことであらう。

そしてまた、彼がこの日もし東京に現はれなかつたならば、後に世界市場を席捲した日本紅鮭罐詰の名聲は、確かに十年間、その出現を遅らせてゐたに相違なかつた。

清六は、そのやうな抱負を秘めてゐる男とはとても思へない平凡な姿で——睡たげな眼を埃風にしよぼしよぼさせながら、都大路の真中を、カムチャッカ河の河岸と同じやうな氣持で歩いて行くのだつた。

平塚常次郎と、妹ヨシとの婚禮は、一と月ばかり前、めでたく済んでゐた。「堤商會」の海の見える二階で、仲人役を買つて出た清吉老が、得意の顎を突き出して、新潟中に響けとばかり「高砂や……」を誦した。

晴れ晴れと顔を輝かせてゐるヨシの姿はいちらかつたが、それよりも清六を微笑ませたのは、野増船長から借着した紋服に、黒い顔を愈々際立たせてゐる平塚の姿だ

つた。ウス・カム村で、カムチャダールの村小町と、怪しげなダンスなど踊つたこと
ありませんといふ顔であつた。

義弟！ 闘志の塊まりのやうな義弟。心から敬愛することのできる義弟。それを得
た大きな歡びが、今も清六の胸を弾ませてゐた。東京の街も、平塚と二人で歩いてゐ
る氣持であつた。

越中島までは遠かつた。幾人もの人に道を訊いた。その最後の人が大きく伸び上つ
て指さした向ふに、洋風のペンキ塗の二階建が、黒つばい倉庫などの家並から抜け出
して目立つてゐた。

もうここでは潮の香りが強かつた。そのせいか、風は身を切るやうな冷たさだつた
が、「東京水産講習所」の筆太な標札を見ると、清六は寒さも忘れ、胸をどきつかせ
ながら、

「伊谷先生にお目にかかりたい者でござえますが……」

と、受付へ名刺を差し出した。

勿論、彼はここで、伊谷先生以外の、實に意外な人物に會はうとは、夢にも思はな
かつた。

受付子はすぐ戻つてきた。彼は打つて變つた町重さで、清六を應接室へ導いた。そ
の扉をあけた瞬間、清六は思はず、

「あッ！」

と聲を放つて棒立ちになつた。

室内にゐる三人の男。そのうちの一人の、角張つた顔が、一文字の眉の下から刺す
やうな眼光でキラリと清六を瞷めたのである。

郡司大尉！

なんといふ奇遇。——清六は、巳れの運命が、眼前で、ぐらりと大きな弧を描いて
轉換するのを感じた。

「堤君、しばらくちやつたのう」

その聲が、遠くでしてゐるやうな氣がした。彼は挨拶の言葉が出なかつた。

「意外だのう。君に會はうとは思はなんだよ。だが、君の名刺を見たら、何か、ここで會ふのが當然のやうな氣もしたぞ、はッは。まアかけ給へ」

郡司大尉は、對座してゐる白髪の老紳士を製造科主任教官伊谷以知二郎、傍の青年を研究生丸川久俊と紹介した。

「ベトロバプロフスクでは失敬した。堤君、あれからどうしたかね？ カムチャッカは辛かつたらう。さうやつて二本の足で立つてる所をみると、無事に生きて歸つたとみえるな、はッはッはッ！」

清六は漸く寛いだ氣持になり、唐草の風呂敷を卓の隅に置いて腰を卸すと、濁りのない靜かな聲で、ウス・カム到着から鍋茶屋手打ちまでの一仕始終を、客觀的な立場で語りはじめた。

この朴訥な田舎青年が、そのやうな華々しい覇氣の持主であり、冒險小説的主人公であらうとは！ 伊谷教官も丸川研究生も、はじめて認識を改めたやうに、眼をまるくして清六の寒風に紅潮した頬を見守つてゐた。

眼をつぶつて、フムフムと聽いてゐた郡司大尉は、話が終ると、厚い掌でばたんと卓をたたいて、

「まづ成功ぢや」

と、宣告するやうに言つた。

「儂もあれから西海岸のオゼルナヤ附近まではつつき歩いて行つてのう。なかなか有望な漁場を發見したんぢや。しかし獨力ではどうもならんから、準備旁々一まづ歸京したといふ譯ぢや。いま京橋新富町の茅屋に棲んどるが、どうも東京には腹の立つことばかり多くてのう、儂にはやつぱり、鮭と同様、カムチャッカの水が適ふとみえるよ……」

際限のなささうな大尉の言葉を打ち切るやうに、伊谷教官は横から顔を振り向けて清六に問ふた。

「で、御用件は？」

「はア、實は、紅鮭についてお尋ねばしたいと思ひましたの……」

反射的に答へた清六の眼に、伊谷教官の顔も、丸川研究生の顔も、郡司大尉の顔も一瞬さつと引き緊るのが映つた。

「紅鮭？」

「はア、紅鮭が何故値段が廉いか、何故内地人に歓迎されるのか——何か利用方法がないものか、それについて實は御教示を仰ぎたいと思ひました。私は申すまでもなく専門的な智識など全然持ち合せのない者でござえます」

伊谷教官は、他の二人と顔を見合せてから、靜かに清六に向き直つて言つた。

「堤さん。御縁があると言はうか、不思議な暗合ですな。實は、僕どもも今、その紅

鮭について話し合つてゐたところでしてな……」

「え？」

「紅鮭については、當所でも豫ねて研究を進めとるのです。紅鮭は動物學的に觀てもまた營養學的に觀ても、決して劣等な魚ではない。寧ろ、鮭鱒族の中では群を抜いた優秀魚である。にも拘らず不評なのは、今まで市場へ出てゐた紅鮭の殆どが、北海道産のものだつたためです」

「……………」

「ところが今度、ここにゐる丸川研究生が、藤野といふ漁業家がカムチャツカから獲つてきた紅鮭について調べてみたんです。するとどうです、カムチャツカ産の紅鮭といふものは北海道産とは全然類が違ふ。アラスカ産やカナダ産と同質か、もしくはそれより遙かに優良質であることが判明したんです」

「しかし、これからが問題ぢや」

我慢できなくなつたやうに、郡司大尉が口を挟んだ。

「なんぼカムチャツカの紅鮭が優良でも、鹽引はいかんど、鹽引は！」

大尉の顔は、アルコールを三本飲んだコスイギンのやうに興奮してきた。

「あんな拙劣な原始的な鹽藏方法！ あれぢや紅鮭が泣く。鹽引にすりや小學生の辨當のお惣菜にはなるかもしれんが、日本の漁業を世界へ押し出すといふ段取りには行かんせ！」

清六一人を相手にしてゐるのではなかつた。海軍大尉の虹のやうな眼光が、さしもの伊谷教官を射竦めるやうに輝き、潮さびた蠻聲がこの應接間から、生徒たちの學ぶ校舎の方までひびいて行きさうであつた。

「毛唐は紅鮭罐詰が好物ぢや。そこを狙つてドシドシこちらから賣りつけてやるんぢや。米人は、コロンビア河の紅鮭罐詰を世界一と呼號し、世界市場を獨占したやうな氣になつとるが、それを粉碎するためには、ただ我々カムチャツカの紅鮭があるば

かりぢや！……堤君！」

「は！」

「君の行つたウス・カムは、カムチャツカ河の河口に當り、コロンビア河に劣らん紅鮭の本場ぢや。君はウス・カムへ一つ、どかんと罐詰工場をぶつ建てなさい。愚圖々々しとると、利に敏い毛唐連が先を越して了ふぞ」

清六は、己れの投じた一石が、思ひがけぬ大きな波紋を描きつつあるのを感じながら、大尉の言葉に深く頷き、そしてちよつびりと自説も挟みたい氣持になつた。

「やります！ 及ばずながら頑張ります。罐詰は外貨の獲得に必要なばかりでなく、今後、いざ戦争といふとき、大切な役目を果すことと思はれますし……」

「そりや無論さうぢや！」

「私も日露戦役のとき、滿洲の酒保で罐詰を扱ひましたので……罐詰の重要性は骨身にしみとるつもりでござえます」

「はッは、日露役の罐詰か。堤君！ あんな醬油で煮ころがした牛肉ビーフや鰯なんざ、もう駄目ぢやよ！ これからは鹽ぢや！ 風味、貯藏、すべての點に優れとる鹽を使ふべきぢや」

郡司大尉は、魔法を授けられたやうにキョトンと眼を瞠る清六を、半ば揶揄するやうに流し眼で見ながら、言葉をつづける。

「實は、僕の発見した西海岸オゼルナヤの漁場といふのも紅鮭の豊漁地なんぢや。僕はあすこで試験的に罐詰工場を營み、青年の實習地として、この水産講習所の生徒や教官を派遣させたいと思ふてな。さうすりや、貧乏な僕も政府から補助金にありつけるし、はッはは、そのつもりで毎日此所へやつてきては伊谷君をいぢめてゐるやうな始末ぢやが……」

大尉は、言葉を改めて、

「堤君。僕の計畫はそつくり君に提供しやう。君と本塚常次郎なら信頼が置ける。そ

れに、オゼルナヤよりも、ウス・カムの方が確かに有望ぢや！」

「……………」

「やんなさい！ 技術的な、専門的な協力は、この水産講習所がしてあげる。伊谷君が嫌だと言ふても、この成忠が協力させてみせる！」

伊谷教官と丸川研究生をちろりと一瞥して、大尉はまるで、所長に就任したやうな元氣であつた。

「勿論、お手傳ひさせて貰ひますぞ」

伊谷教官も、温厚な微笑を泛べて、勵ますやうにさう言ふのであつた。

「有難うござえます……」

さう答へたきり、清六は言葉がつづかなかつた。喜びといふにはあまりに大きな感動が、血潮を湧き立たせるほど、胸にこみあげてくるのだつた。

その夜——郡司大尉の新富町の邸に一泊して、翌朝、新橋驛へ歸郷の足に向けた清

六は、顔形が違ふほど、半分かた高邁な郡司成忠になつてゐたのである。

彼の上京の最も大きな收穫は、言ふまでもなく、罐詰事業に一條の道を見出したことであつたが、それにも劣らず彼を驚喜させたのは、懸案の日露漁業條約が、遂に實施の運びになつたといふことである。

郡司大尉の語るところに依れば——それは七月二十八日、露國セント・ペテルスブルグで、日本側本野一郎、露國側イズヴォルスキー兩代表が正式調印し、九月一日、全文發表の運びとなつたのである。

九月一日——その頃は、五萬尾の魚をぎつしり満載した賀壽丸の船室で、北海道沖の暴風に悩まされてゐた清六である。全文十四條のうち、只の半條さへ知らう筈がなかつた。

露西亞帝國政府ハ本協約ノ規定ニ依リ、河川及ビ入江^{イシレット}ヲ除キ、日本海及ビベリ^{ラッ}ン^グ海、オホーツク海ニ臨ム露西亞沿岸ニ於テ、^{オットセイ}鰐^イ及ビ^{ラッコ}獵虎以外ノ一切ノ魚類及ビ

水産物ヲ捕獲、採取、製造スルノ權利ヲ日本國臣民ニ許與ス。

これが、最も重要な「第一條」であつた。

かくて、正當な權利は確保された。

全日本の漁業家よ、歡聲を擧げろ！

もうあの屈辱的な「買魚」營業とはおさらばだ。傀儡的な露人の名儀人を高給で雇ふ必要もない。來年からは、堂々と日の丸の旗を押し立てて、北の海へ向ふことができる。日本の網で、日本の船で、誰に遠慮もなく豊かな銀鱗を獲ることができると十萬の忠靈よ瞑すべし！

夜汽車の窓に揺られながら、清六の夢は、限りなく大きく樂しかつた。

商司へ土産のブリキの軍艦が、唐草の風呂敷をふくらませてゐる。

そして清六の胸は、早くも來年度の事業計畫——その遠大な希望と期待にふくらんでゐるのであつた。

二つの陣營

一八〇

明治四十一年。

「堤商會」創業第二年目である。

日露漁業條約實施第一年に當るこの年の春、清六は義弟平塚と同道で、浦鹽斯德ウラバオストフへ向つた。

そこでは、條約に依る漁場の入札が行はれたのである。

首尾よく落札した漁場は、カムチャッカ河口西南四露里の243號と、同じく東北四露里の244號であつた。それは孰れも、去年彼等が開拓したウス・カム村の所在であつた。

紅鮭の本場——カムチャッカの優良漁場は、かくて今年も確保されたのである。

六月初旬、寶壽丸は新潟を出帆した。もう一艘、今年新たに傭船アライマーされたスクーナ型の喜多丸が、寶壽丸と舳を並べて北洋へ急いだ。

コスイギンもゐた。ツツミ・デバートの顧客カウクイは首を長くして待つてゐた。しかし、「買魚」から「直營」へと飛躍した堤商會は、去年のやうな密接な關係を土民たちと結ぶことはできなかつた。

二十名の船員と、三十五名の漁夫は、清六と平塚の手足のやうに動いた。漁獲は順調に進んだ。しかし、漁の切れ間になると、二人は今年も傳馬船を浮かべて、海岸・河川を隈なく巡つた。紅鮭の習性を調べた。

近き將來に實現すべき罐詰工場の計畫が、徐々に確實に、二人の腦裏に築かれて行つた。

二千七百石——これがこの年の、鮭鱒漁獲高の總計であつた。

一八一

寶壽丸と喜多丸は、それぞれ八分通りの船脚で、八月上旬ウス・カムを後にした。鮮度も良好であり、相場も悪くなかつた。かなりの収益が、堤商會にもたらされ、船員漁夫の全員を潤はした。

清六の夢が、一步、實現へ近づいたのである。

明治四十二年——創業第三年目。

この年、カムチャツカ半島は、一時海岸線が變化するほどの大漁だつた。

堤商會の落札した漁場は、今年もウス・カム村243號と、244號に代る河口西南六露里の242號であつたが、この二つの優良漁場は、まるで數萬ボルトの動力をかけたやうに魚群を掻き集め、吸収した。

一日五回の食事を要する長い日中、人々は、汗の最後の一滴まで搾り出す思ひで働き抜いた。——しかもこの間、清六・平塚・高橋などの幹部連中は、撓まざる進取の

氣力を、肉體的な過勞の中へ埋め去ることはなかつた。

清六の踏査と研究は、愈々積極的になつた。

海岸の淺瀬や深みは、地圖に描いたやうに彼等の頭に疊み込まれた。それに依つて網（建場）を何所へ据えるかが、最も有効な方法で決定されるのであつた。

罐詰工場の設計圖は、既に清六の胸中に製圖されてゐたし、その敷地も、船着場との聯絡が最も便利な、そして排水のよい草原の上に定められてゐた。

清六は毎日のやうに、小高い「敷地」の上に立つた。海を變色させる鮭の群が、今日も海岸へ押し寄せてゐる。今年だけは、この夥しい鮭を、郡司大尉に罵笑された「鹽引」にするより方法がないが、來年こそ、あのうちの尠くとも三割は、ブリキの光澤も鮮やかな罐詰に仕上げてみせる——さう心に呟くのだつた。

時にはまた、眼下の雄大なカムチャツカ河にぐつと眼を注いで、連れの高橋に、こんなことを囁くこともあつた。

「このカム河を、すうつと上流まで遡つて行けば、たぶん反対側の西海岸へ出られる
 こんだらうのう……」

「……………」

「西海岸にも、郡司さんの発見されたオゼルナヤといふ紅鮭場所があるてがんだ」

高橋榮吉は、呆れたやうに、この際限もない夢の持主の、少し無精髭の生えた顔を
 見上げるのであつた。

この年の總漁獲高として記帳された數字は——紅鮭二千九百石、白鮭千石、合計三
 千九百石。前年に比し四割五分の増収であつた。

すつかり老けた顔になつた天狗の面を、相變らず船首にぶら提げた寶壽丸を先頭に
 喜多丸、それにその年から新しく傭船した住榮丸の三隻は、膨れた財布のやうにすつ
 しりとした船脚で、十月中旬、新潟の埠頭に到着した。

何事も三度目、しかも三度とも、清六の放つた矢に狂ひはなかつた。彼はもう、押

しも押されもせぬ新進漁業家であり、口さがない郷里の人に言はせれば「豪儀な俄か
 成金」であつた。鍋茶屋の廣間で、鮮度が悪いとチャンをつけられることもなくなつ
 た。

最初からの協力者——清吉老の顎が、人と會ふ度に、また一寸ほど長く前へ突き出
 されるやうになつた。父吉平も、漸く、三條の家の二階で、冬中「成吉思汗」を讀ん
 でゐた息子の魂膽に合點が行つたし、糸子夫人も商司も、もうカムチャッカまでの
 距離を、それほど遠いものには思はなくなつた。郷里の人々にも、地球の涯の獸も棲
 まぬ氷の海がカムチャッカでないことが、おぼろげながら判つてきたのである。

「堤商會」の金庫には、初めて現金らしい現金が残つた。罐詰工場は、實現の一步前
 まで來た。

ありきたりの漁業家ならば、うだうだと何もしない惰眠生活に入るか、それとも、
 一攫千金を一夜千金にさらけ出す豪遊に日を送るかする冬期中、清六と平塚は、熾ん

な意慾を以て活動をつづけた。

來年度事業計畫の樹立。

それに基く資金、一萬五千圓の調達。

從來の事業成績の研討。

罐詰工場設立に伴ふ手續き。

鐵と鹽の獲得。

丈餘の雪を蹴つて、幾度か東京へも出向いた。水産講習所との連絡も、愈々密接になつた。——製造科の教官鍋島熊道を引率者として、研究生菅宮清吉、海老澤光治、外に職工數名が、郡司大尉と、講習所長松原新之助の幹施によつて、明年、清六たちとともに、ウス・カムの現場へ出張することに決定した。

(堤清六が、愈々罐詰事業に乗り出す！)

(今に、日本の市場から、外國製の鮭罐詰が驅逐される！)

その噂が、燎原の火のやうに、中央・北越の漁業界を席捲してゐる頃——北緯五十六度のウス・カムの現場では、何が起つてゐたか？

カムチャツカ河が凍結する以前——堤商會の三隻の船が錨を捲いて南へ下つた直後まるでそれと行き違ひのやうに、一隻の見知らぬ三橋船が、どこからともなく磯波を蹴つてカム河の河口に現はれたのである。

船首舷側には、コスイギンにも讀めぬ横文字アルファベットの船名が白く浮き出し、船尾には毒々しい色彩の英國ニニオン旗が翻つてゐた。

鮭鱈の去つたこの沿岸へ、今頃何の用事であらう？——カムチャダールが不審さうに睜つた眼の前を、三橋船は壓倒的な威容で遡航してきた。河口から約四露里——ネルビーチ湖といふ小さな湖のある地點に錨を卸すと、夥しい鐵材や木材や機械類を荷役しはじめた。

河岸の草原の一部が約二百坪に亘つて長方形に截り取られ、地均しが済むと、船員

たちはみな大工に早變りしてゐた。基礎工事の騒音が絶えると、いつの間にか巨大なボイラーが据えつけられ、それを取り圍むやうに柱や梁やトタン屋根が形作られて行つた。

最後に——カムチャダールを驚嘆させたのは、トタン屋根のてつぺんから空を衝くやうにひよろひよろと伸び上つた真黒い細長い三本の煙突だつた。

工場を圍むトタン塀には、大きな四角張つた書體で *ALFRED. E. DENBY* といふ文字が白ペンキで記されて行つた。

「來年、私、やつてきます。工場、保管たのみます」

訛りの強い露西亞語でさう言ひ、愛嬌笑ひと一罐のアルコールをコスイギンに残して行つたその男は、金髪と、白哲の皮膚と、柔和な海のやうな瞳と、廣い額と、娘のやうな薔薇色の唇の持主だつた。

三橋船は、クルチューフスカヤの肩を凍める雪嵐雲に追はれるやうに、何所へとも

なく、河を下り、海へ進み出て見えなくなつた。」

二

明治四十三年。

DENBY 罐詰工場的主人にとつては、西曆千九百十年の初夏が訪れた。

まだ連山の雪が白く、凍原の上に青みらしい青みも見えぬうちに、葛湯のやうな海霧を押し分けて、去年の英國旗を大鷲の露西亞國旗につけかへた三橋船が、王者のやうにカムチャツカ河の流水を蹴つて溯船してきた。

工場のトタン屋根には、まだちよつぶりとした残雪が、シベリヤの地圖のやうに溶け残つてゐた。濕つた雜草の上に、更に夥しい得態のしれぬ格好をした機械類や、鹽吹の山や、漁網や食糧や、刷り上つた新聞紙のやうにキッチンと揃つた鐵板の束が、續々と陸揚げされた。それと同時に、大勢の、革や毛皮で威容を備へた皮膚の白い人間